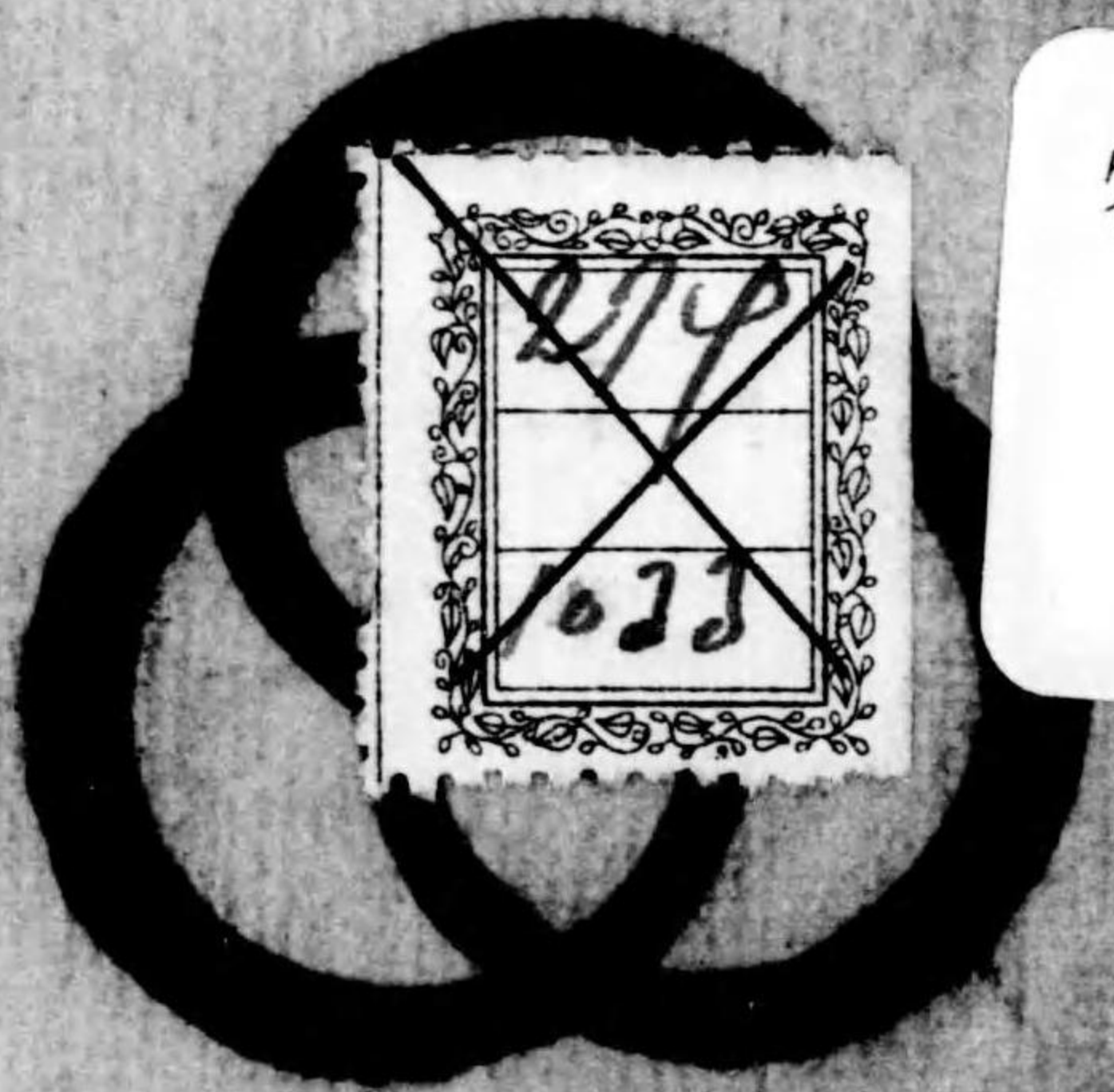


ズーリセワナミ
良 人 學 校
三 圭 浦 三



特



始



特100
115



編四第書叢ワナニ

良
人
學
校

大正
3. 10. 18
内交

モリエール 喜劇 良人學校

三浦圭三 解説

一、喜劇論

文學作品を大きくわけると韻文と散文になつて、その韻文を更に小わけすると詩と歌と句とになり、其詩をもう一つ小別けすると長詩と短詩と劇詩となり、その劇詩を又々小別けすると悲劇と喜劇となる。悲劇とは其結果が悲惨に終るもので、喜劇とはその結果が好笑に終るものである。哀別離苦とか、軋軋落醜とか、人生不如意のかなしみは前者にあらはれ、矛盾とか、誇大とか、撞着とか、機智とか、好笑とか云ふをかしみは後者にあらはれる、しかし喜劇の中心生命とも謂ふべき感情を一言以て覆へば滑稽の情であらうと思ふ。或心

理學者の分類になると、滑稽の感は美感の一種で、美感を優美と壯美と滑稽美とにわけ、可憐綺麗なもの優美に、驚奇畏怖珍異安心の感の結合したものは壯美、好笑機智矛盾の結合したものは滑稽だと云ふ。此やうに滑稽の感を以て美人感の一種にさり入れることの可否如何については學者説を區々にして一概に可さも否さもなつて居ない。が、自分は少くともかう云ふことは出来ると思ふ。即此滑稽の感が一種の美感であらうが、あるまいが、此感は他の高尚なる情操と同じなみに列して其一隅を占むべきものである。と、

(2)

そして滑稽の感の主なる要素は矛盾である。史に稱す。上杉景勝はいつもにがりきつてむつかしい顔をして、曾て一度も笑つたことがなかつた。けらいの誰もかれもが景勝のにがりきつた顔を見るばかりでニコツともホヤツとも笑つた顔を見たものさては一人もなかつた。ところが或日のこと脇息によつてウツトトと寢晝をしてゐると、家に畜うた猿が其冠をさつて自分にかぶつて梅干づら

の公卿然たる起居振舞、ヒョツと目があいて之を見た景勝は思はずハ、ハ、と大笑した。と云ふ、此即景勝の頭には滑稽の感が湧いたものである。冠と云へば公卿縉紳のかぶりもので、之をかぶればチャンと居すまぬを直して席に坐して笏の一つもキツと持たうと云ふやうな四角四面なものである。それに猿はさうかと云ふ「舞ひにけりお辭儀しにけり走りけり」猿舞はしが色々舞をまはせて居る間は如何にも輕妙を極めたものである。やがてお金なり菓子なり米なりを貰つて一禮する。まだ猿らしいところがない。忽裝束をさつてゴソ／＼と走つて主人の背に負はれやうとするに至つて畜類の正体歴然たるもので、最早かうなれば公卿でも武士でも番頭でもない。尻真赤いけの猿である。木のぼりに懸命になる猿である。ちつとも人間らしいところはない。景勝の心の中では此矛盾感が起きたのである。リ、しい規重面な公卿振と輕々しいそ、つかかな猿の本態と、その矛盾に想ひ到つたときに、思はずフ、とふき出したものであ

(3)

る。

次に滑稽の要素を爲すものは誇大である。膏藥煉と云ふ狂言は即此好例で、京の膏藥煉は大きな臺石を吸ひつけて安々さ庭に引いたと云ふと鎌倉の膏藥煉も磨墨の名馬が上天したものを吸ひつけて大地に下したと云ふ、藥味はさきけば地を走る雷、海を泳ぐ大牛、氷の日干に駿馬の角と云つたやうな到底あり得べからざるものを並べる、その駄法螺を吹くところは即誇大のなかしみである。次に滑稽の感の要素を爲す者は機智頓才である。軽いウイットである。東京バツクに出る茶目のやうなものであり。バツトホーイ、ステイアリーにある徒らつ見のやうなものである。袖屏風に下半身の男女の裸體畫を書いて、向ふから顔を出す叔父、叔母の肖像を上半身は通常下半身は裸體と云ふ奇態なものをおらはすと云ふのがその一例である。

次に滑稽の感の一要素には用語の配合と云ふところがある。

(4)

瓢箪から胸が出る

と云ふのに語路を合はせて。

冗談から暇が出る。

と云へば何かしらをかしい感じがする。

あしびきの山のいも。

千早ふるかみくす買ひ。

菅家此たんび(足袋)此たんび……。

と云ふかけこさげにも何さなくをかしいところがある。

行きかゝる、來かゝる、袖に水かゝる

足輕いかる、お輕、こはがる

と云ふ「かる」の反復や

瓜賣が瓜賣に行て賣り廻し

賣り賣りがへる瓜賣りの聲

さ云ふ「うり」の反復も亦何かしら云うてゐるうちになかしみがわいてくる。

蚤一疋が鼻の崖から這つて鬚の林へおちて頬のあげたの島の中で一人心中を
して云々

さ云へばその譬へ方で誰しもをかしいと思ふ、此等は用語から來る滑稽の感である。

此滑稽の感を材料に採つた文學作品についてしらべて見ると由來我邦人は樂天的好笑的國民であるにも拘らず、此種の方面の發達が其遅々たるものであつたさ云ふことがわかる。上古の文學には萬葉中二三のざれ歌があるだけである。

中古の文學では韻文中古今の俳諧歌があり、散文中竹取物語のこはじやれや土佐日記の云ひかけの洒落はあるけれども未だ以て純然たる滑稽文學と云ふことは出來ない。源平時代、鎌倉時代、南北朝時代には落首と云つて落書を歌で書

いて罵詈、惡口、諷刺の方便にしたもので。

伊勢武者は皆緋緘のよろひきて

宇治のあじろにかゝりぬるか

此頃部にはやるもの、夜討強盜にせ繪旨

の如きがそれである。

室町時代に至つて始めて喜劇とも謂ふべき狂言があらはれた、狂言、くはしくは間の狂言と云つて何の間の狂言かと云ふと能の間の狂言である。能は詠の詞を動作に演ずるもので、全体が悲劇的のものが多い。さなくは生眞面目なものが多く、その悲劇的な生眞面目な能の間々に挿んで滑稽、諷刺、機智、頓才、揶揄、諷刺、嘲笑などを脚色して観客をして哄笑一番肩の懲りを直させるもの即間の狂言である。

狂言の脚色は極めて單純、幼稚なものである。伯母酒のやうな小失策をとつた

ものもある——膏藥煉のやうに事實の誇大にをかしみをとつたものもある——
 狐塚のやうに日常の事柄の行き違ひを取材したのもあるし、萩大名のやうに
 大名の無知を諷刺したのもあるし、初山立のやうに自家撞着のをかしみをと
 つたものもある。

伯母酒と云ふのは酒すきの甥が酒屋の伯母に酒をよんでくれと云つてはれつけ
 られてこんどは鬼の面をかぶつて、酒をのまさなかむぞと云ふ、伯母はこはが
 つて早速酒を出すと、しめたさガブのみをつけてだん／＼酔ひがまはつて伯
 母の膝を枕にして寝ながら歌ひ出す、トタン、鬼の面かヒヨツとされて化けの
 皮があらはれて伯母はおのれつと云ふ、甥はゆるさしめ、と云ふ、やるまいぞ
 やるまいぞで終りになつてゐる。

狐塚は狐のよけい出る田の番に太郎冠者を番にやつておいたが、退窟だらうか
 らと云ふので、モウ一人次郎冠者をつかはすと、太郎冠者は、狐が化けて出た

ものに違ひないと思つて、矢庭に次郎冠者を縛つてしまつた、主人は尙二人で
 も退窟だらうと云つて自らやつてくると太郎冠者、また／＼化けよつたと云ふ
 ので矢庭に主人を縛つて二人をせめて尾を出せ、尾を出せと云ふけれども二人
 とも元來本當の人間だから尾を出さうな筈がない、ヨシ／＼することがある
 松葉をくすべて、コン／＼なかしてやらうと云つて、あちらへ松葉をさがしに
 行つてるまに、次郎冠者と主人とは互に縛りを解きやうて申合せをして矢張り
 前と同じやうに手を後手に縛られたもの、やうに装つてゐると、そこへ太郎冠
 者が松葉を持つてくる、兩人は一時にオノレツと兩方から太郎冠者を掴まへて
 胴上げをする。ゆるさしめ／＼、やるまいぞ、やるまいぞとなつてゐる。

萩大名はさる大名が萩の花見に招待せられて行かうと云ふ段になつて「先方の
 主人は風流人だから、ヒヨツと歌をよんでくれいと云はれては困る」と云ふの
 でお供の冠者にたのんで歌のにはか稽古を始める。

七重八重九重さのみ思ひしに

さよ咲き匂ふ萩の花かな

さ云ふのを教へられて、それを何べんでもくりかへして暗記して先方に行つて案の如く歌を所望せられて初手一べんは供の冠者が扇の骨や色々の仕方て合圖をしてくれて、ヤツトのこゝ無事に歌が出た。そこでモウ安心さ云ふもので冠者は随意にあちらであそべさ云つてあちらへやつた、そのあそへ主人の難題、「さてもものこゝ今のを一寸短冊に書いて下されい」さ云はれて先生ビツクリ、ガツクリ、シヤツクリが直ぐさまり、こなつさ、へえつさ、あゝつささ色々思案に苦しんで、思ひもよらぬ風流せめにあふさ云ふ趣向である。

初山立は山賊の相棒二人、其日の稼ぎの少なかつたこゝをこぼして、貴様が鈍なからだ、イヤ貴様が拙いからださ、ハテはスツタモンダの大騒きさなり、いよく段平を引きぬく段になつてから片一方が「さてもものこゝ、かうして果し

合ひをするからには本式にやらうでないか」さ云ふ「そらよからう」さ双方がどう云ふ風にするのが正式なやらわからぬが「マア果し合だからどちらぞ死ぬるだらう」「死んだら命がなくなるぞ」「書きおきさ云ふこゝをしよう」「それく、それが一番の手だ」さ云ふもんで、そろく書置のもんくを考へる。所が兩人共元來が目に一丁字のないものばかりである「一筆啓上」さ云ふて年頭の挨拶めいてゐるさいつてはやめ、此世に關係御座なく候さやつては、此は三下り半の去り狀らしくていかぬさ云ひ「まぬらせ候」あまりやさしすぎる。「然れば」あまり四角張すぎてゐるさ、さりどり二人が相談の結果、やうくのこゝに文言が出来てよんで見ると、なかくあはれに出来て居るので「おら何だか悲しくなつてきた」「おれも何だか悲しくなつてきた」「オラ死ぬるのが嫌になつた」「オレも死ぬるのが嫌になつた」どうかして助かる工夫はないかさ又々兩人が思案こやんを重れた揚句、果し合ひをしようさ云ふたのがもさ

だこ云ふこゝに氣がついて、モウ／＼仲なほりをしよう云ふ。もとよりそれが賛成だこ云ふ、ケロリと直つて「さてものこゝ今の書きおきを歌にしてうたつて歸らう」「オット合點」聲高々に、歌ひつゝ、舞ひつゝ、囃しつゝ、笑ひつゝ、めでたく我家をさして歸るこゝ云ふ筋で、喜劇的の價値の比較的によく發揮せられたる脚色である。

徳川時代になつて、あらゆる文學は長足の進歩をした其一般文學の進歩につれて滑稽文學も可なり發展した、殊に江戸ッ兒氣質は豁達をよるこび洒脱をよるこび輕快をよるこぶこゝろから文學作品の滑稽化的傾向は、韻文にも散文にも大分あらはれてきた。

韻文では川柳、狂歌があり、散文には俳文、狂文がある。

川柳があらはす滑稽は、輕いユモアと警句的の穿ちこ、惡意なき批評と一言にして云へば、浮世を茶化したやうなをかしみである。

向ふから硯をつかうか、リウゴ

居候三杯目にはそつと出し

居候寢言に云ふがホンの事

コツソリと肝癪起す居候

なごか、リ人の境遇の一端をあげてよく全豹をあらはしてゐる。

田舎下女ツルベで井口のミルを汲み

燈心の缺がないと下女は云ひ

山出しの下女は割箸二ぜん出し

蛙のんだ蛇のやうなり下女の帯

口上を下女は腹からゆすり出し

と下女の土臭いことをひやかし。

義盛も飯を喰ふにはあきれはて

小便もせず平家は船にのり

と餘計の想像をして見たり。

歌がるた人と云ふ字に手が五つ

あがるなと云はぬばかりに帳を出し

と寫實を歌つたり皮肉に出たり。

おしろいのまくばりをする變な面

と悪口して見たり。

ヨツ引いてひやうと放たぬかッしかな

とおさしたり。

光陰矢の如し 雪隠もうたまり

君々たらず 腐つてゐる安玉子

性は善なり モシ何かおちました

と不調和の調和にをかしみをさつたりして随分氣のきいたものもある。

狂歌のをかしみは川柳のそれに比べると、餘程てぬるいところがあるが又それ

だけ想の豊かなものがある。

世の中の人と煙草のよしあしは

煙となりて後にこそ知れ

争はぬ風の柳の糸にこそ

かんにん袋縫ふべかりける

世の中を何のへちまと思へども

アラリさしてはくらされもせず

にくまれて世にすむかひはなけれども

かあいがられて死のよりはまし

などはよく人口に膾炙してゐる。

俳文のなかしみは内容も豊富なり形式も優雅でよいけれども、やゝ貴族的、古典的、街學的の嫌がある。「すゝ蟲のちよよなきてなごしも母を慕はざる」「もにすむむしのわれからさ」「榎木の僧正が云々」「久方の月だに日の光をかれば云々」凡そ此等一二の断片のことばだけすらそのなかしみを味はへるには古今集の歌も知つて居なければならず、徒然草の一節もよんでゐなければならぬ。そんなむつかしい滑稽はいはれをきいて成程と云つたやうな風で、一寸見るなり、ハ、と笑へるやうな平民的な近代的な達意的な趣がないのが至極遺憾である。

(16)

狂文はそれにくらべると随分面白いのがないではない、けれども此さて矢張街學的である。それが傑作かと云はれて、此々だときつぱり云へるやうな立派な狂文は少くないやうに思ふ。先は、一九の膝栗毛、三馬の浮世風呂位にさゞめなささう。

謡曲の繼承に淨瑠璃がある如く、狂言のあとつぎには脚本があつて、どちらも前者に比べて長足の進歩を爲してゐる。が、喜劇的の効果と云ふ点から見るとらば脚本よりは淨瑠璃に挿んだ狂言的部分の方に面白いものがある。悲劇的の謡曲にはさむに喜劇的な狂言を以てする如く、悲劇的な淨瑠璃にはさむに喜劇的ななかしみの場面を以てしたものである。

義經千本櫻には忠信の捕手に平家方のテモ大將が吉野へ攻めよせるところ「まてくまでくけらい共、腹がへつては軍が出来ぬ、ごごごころに茶屋ないか、ごごごころに茶屋あらば、飯の四六パイもさせこまん」と愈々茶屋についめいくのこのみをさふ。「うごんは」「きらひ」「そばは」「きらひ」「すしは」「きらひ」「きらひきらひできらひごも、凡そ軍のかけひきは、敵がよはけりやドツとせめ、強いときにはド、ドツとあせせめ……」「と云ふ一段、如何な苦蟲連も笑はずに居られない。

(17)

一の谷嫩軍記には俄さむらひの田吾平が勝手なれぬ甲手應當をつけて物珍らしげにさ見かう見するところがある。忠臣蔵には伴内の失策物がある。音に時代物のみならず、世話物にも「心中と云ふものはいこう寒いものぢや」(曾根崎心中)と云ふ風のなかしみや、梅田の心中の彌市のやうに、つくり髯して相敵をおどす趣向など、何れも觀衆にドツと大笑ひさせるしくみで、筋も可なりよくはこばれてもゐるし、形式も割合によく引きしまつてゐる。

明治時代となつて新に西洋文藝の要素を加へ韻文も散文も大刷新、大革命、大變動を見るやうになつた。随つて滑稽文學も其一部を負擔して西洋人らしい滑稽を加味するやうになつた。明治初年に出た窮理圖解や安苦樂鍋などの滑稽はまだ舊套を脱しない。西洋膝栗毛のなかしみも舊幕十返舎一九の道中膝栗毛のやき直しに少し西洋の色をつけたまでのもので「西洋の子供ばえらい。子供までが英語を知つさる」と云ふ風のものばかりであつた。

川柳も久良岐など云ふ一派の好事家によつて復興し、狂歌の後身はへなぶりなど云ふ名目で讀賣その他の諸新聞の通俗文壇を賑はし、俳文も巖谷小波其他數氏の試作が世に公にされたが一概に云ふと滑稽文學は韻文の方では寧退歩の方だらうと思ふ。然るに散文の方では續々新味の加はつたものが出來て、東京マツク、大阪マツク、滑稽新聞などは長途の瀛車旅行の車上のよい慰みものとなり。小説には撥發小説、冒險小説などの傑作に見るべきものがあり、尾崎紅葉の夏小袖など今日から見ても立派な喜劇物である。銀行が本業で大變滑稽家だと云はれてゐる益田氏は太郎冠者と云ふ名で洋行から歸つて折々おもしろい喜劇を作る、沙翁の傑作が譯出せられて「から騒ぎ」などが愛讀せられることなつて可なり喜劇界は色めきわたつてはゐるが、俳ありやうはまだ前途遠しと云はればならぬ。作家も第一流の作家は悲劇に力を入れて喜劇に筆をさらないし、俳優も第一流の俳優は悲劇に力を入れて喜劇はついたり位にこゝろをえて

あるし、観客も相當鑑識の高い人々は悲劇を正劇と見て喜劇は少し念の入つたにわか位にしか思つてゐない。今日大阪で演ずる喜劇の俳優には喜樂會、笑樂會、曾我廼舎一座などがあつて、始終何かを演じてはゐるが、俳優の腕の割に脚本がよくないものだから勢其劇の品位が低くなつて活動寫眞の實演か、にわか、口上茶番か、落語のひきのばしか、と云つた風のものばかりである。凡べての文藝作品が世界的傾向をこつて歐米各國の作家の作品と相伍して評論せられやうとしつゝある我邦今日大正の文壇に於てひさり喜劇の脚本ばかりはあまり大した進歩も認められず、依然様によつて胡蘆を舐がいてゐるさはまことになさけない次第ではないか。

今こゝに解説しやうとするモリエールの喜劇物は喜劇物として決して絶好のものではない、時代が古く、場所が遠い路^ル易王朝時代の作であるから到底現代の我邦文壇で獅子吼する程の價値がありさうな筈がない。否多くの近代劇を讀

た吾々は何だか燗酎のあそで水のまぜた酒を飲まされるやうな心地になりぬてはない。けれども此さて今の貧弱なる我喜劇脚本界に向つては多少の裨補する點がないでもなからうと思ふからこゝにその一編を紹介することにしたのである。

大正三年七月廿九日

青嵐そよぐ

故郷丹波に於て

著 者 識

二、モリエール

モリエールは今から二百五十年前即我舊幕元祿の時代に佛蘭西ルイ王朝の文壇に喜劇作家として驍名を馳せた人で其作には此良人學校を始め、

艶舌寛
 倉吉
 夫人學校
 夫人學校是非
 稽古芝居
 押付女房
 偽善者
 戀の醫者

押付醫者
 姦婦の夫
 守錢奴
 染直大名縞
 痛着男
 臍病秘藥

なががあつて、我邦では草野柴二氏が此の紹介につまめておられる。

モリエールの脚色にはやゝくゞいところがあるけれどせりふの斷片には強い諷刺アイロがあり主人公女主人公には明瞭な矛盾があり舞臺上の効果も可なり多く、よみもの、脚本としても可なり見ごこちがある。

此夫人學校の主人公は無論堅三で、没常識な舊弊な頑固な人間がさみ子と云ふ未來の妻たるべき女を自分の舊式の型にはめやうと思つて出入必ずみはりして

少しも他の異姓に接近せしめず、かうして世間せげく成長させて、此廣い世界に男と云へば、自分よりえらい者はないと思はせやうと思つてゐる。女をして外來の客に接せしめたり、他の儀式會合の席に出させたりすることはさりと直さず墮落を勤めるやうなものだと思へてゐる。

こんな主人公の下に育てられた女主人公の富子はそれが嫌で嫌でたまらないのですぐ近所の守口と云ふ男に戀をする、二人が相思の仲になつてもとても一筋道であへさうにないので、富子は偽つて此手紙はあの守口と云ふ男がくれたのだが、手を觸れるのも汚らばしいからかへしてくれいと云ふ、夫の堅三は本當だと思つてそれを返しに行く、守口が中をあけて見ると甘言たら／＼の艶書ラブリータである。妻の姦通を夫が取り持つとは……凡そ世の中にこんな大なる矛盾はないであらう。それとも知らずお人よしの堅三はひとりホク／＼のものでよろこんでゐる、ところが最後にその事の真相がわかつて、失望落膽その極に達する云

ふ略筋で其間幾多の自家撞着やパラドックスやユーモアがこきまぜてある。堅三に配せられた副主人公は新助と云つて萬事を常識的にやつてのけやうと云ふ極めて世間的の考へをもつてゐる人で、さみ子の妹よし子を育て、も大した壓制もなく束縛も加へず、お前のすきな様にするが可い。何分わしとは年齢が大分ちがつてもゐるのだから、ごこか外によいところがあるんなら嫁くもよし、それとも、自分に従ふつもりならさうするもよしと云つてゐる、さよし子は大きう此新助の寛裕な心を徳として心底から深く新助を愛して、是非に新助の妻になりたいと云ふ、こゝにも一種の矛盾がある。妻になれと強められた富子は妻になりたくないと思ひ、妻にならなくても可いと云はれたよし子は妻になりたいと思ふやうになる。此等の筋を上手にからみ合せて可なり觀客を笑はせるしぐみになつてゐる。

三、良人學校

人物

兄 新助

弟 堅三

さみ子の情人 守口一雄

従僕 留造

代理人

公證人

さみ子

よし子

はる

場所

巴里

時

春

第一幕

(その一) 兄 新助 弟 堅三

弟 どうが兄さん、あしびきの山の芋のやうな、長々しい議論はもうよしませう。どうせ人間は十人十色ですから、あなたが私のやうに考へられない如く、私もあなたのやうに思惟することが出来ないのですから。あなたはあなたの御すきなやうになさるがよろしい。私も私のすきなやうにやつて行きます。……なる程年から云ふと兄は弟より年長者なり、姉は妹より前へ此世へ出てゐるには違ひありません。……だけでも近頃年の効は龜の

甲よりも流行後れになりまして……年齢で弟を壓迫しやうなど云ふまぢがつた兄はだん／＼巴里から排斥されつゝあるやうです。

兄 けれども貴様のやりくちは皆が感心しないぞ。

弟 でせうとも、あなたのやうな呆見ヌケツチヨだつたら。

兄 何呆見……此は御挨拶だ。

弟 だが一體世間のツイ／＼連中は私の何處を咎めだてするのでせう。さ申しても私は別にあなたに指導を仰ぐと云ふ、意味で尋ねるのではないんですよ。不幸にも此世にあなたのやうな兄と云ふものを持つた私ですから、形式上一々聽かんけりや濟まないんだから聽くんですよ。

兄 うん、それはお前が世間なみの娛樂を遠ざけたりすることなすことが妙にひねられてゐるからのことだ。第一その服装フクサツだつてさうではないか。

弟 着物ですか、私は此頃の巴里ッ兒のやうに流行の奴隷になりたくはない

んです。小さい帽子がはやること云つては大切な頭を風にさらし、捲髪マキゲがはやること云つては耳の兩はたにカラスグチナハ鳥蛇のやうなものを出したり、赤兒の襦袢の尻からげよろしくと云つたやうな短いチョツキ、またそれとで反對に子クタイは長く／＼臍までさしかして、頸から胸を通過して上腹中腹を経て下腹に達すること云ふシベリア鐵道のレールまがひのことをしたり。手袋兼用になるやうな長いカウスをつけて食事の時にはスーパへつけて洗濯して見たり、私は流行スタイルと云ふもの程奇體なひねくれたものはないと思ひます。

兄 デモ吾々はいつと世間の多數と歩調を合せて他人から指をさされるやうなことがあつてはいけない。あまり突拍子もないことは他人の氣に逆らふものだから、わかつた人は服装についても言葉についても容體ぶらないでちやんと流行のうつりかわりにつれて行くものだ。

弟 世間の多数と云ふ者はいつも「愚」と云ふ語の代名詞になつてゐます。

御覧なさい。キリストでも、コペルニカスでも、それから、キリストでなかつたキラリストでも、コペル三カスでも、コペル四カスでも、オタンチンバレオロガスの姉であると同時に弟であるプロアンチスランサブスタンシエーシヨニスチアルでも、そして私でも……。

兄 出放題の名を云ふな……まるで名前の製造人のやうによく動く唇を持つてゐるな。

弟 どうせ世の中は盲千人にめあき一人ですよ。

兄 オレはその何れに屬する人間だれ。

弟 無論でき。

兄 無論何だ。

弟 め……でき。

兄 め……何だ。

弟 め、く……でき。

兄 め、く、……それから何だ。

弟 めがついて、くがついて、そしてらがつくんです。

兄 オレを盲だき云ふのか。だがね、世の中は一人の目あきになるよりは千人の盲の仲間入をした方が安穩だよ。ヒョツとするきはりつけにあつたり牢舎につながれたりするからね。

弟 だが、私は私の好きな道を廻つて行きます。あなたもあなたのおすきな道をお廻りになるが可いでせう。私のすることなすことが目障の人はみんな盲になるが可いです。耳ざわりになる人はみんなツンボ聲になるが可いです。口障りになる人はみんな啞になるが可いです。心障りになる人はみんな魂をセイヌ河へ流してしまふが可いです。癩に障ると云ふ人はみんなその肝

癩玉をどつかの質屋へ質におくが、肝癩玉銀行と云ふやうなものがあればそこへ預けておくも可いです。私は私ですから私のよいと思ふことを私の頭で考へて私の手で實行して私自身にたのしむのです。

兄 エ、うるさい、煽風器の羽のやうに一寸さはるさメラくメラく、お前の口はまるでおしやべりの自動器だね。

(その二) よし子、さみ子、はる、堅三と新助と

妹 姉さんが叱られると私まで自分のことのやうにつらいわ。

はる 始終お部屋にばかり居らして、ちつとも誰にもおあひなさらさないなんてあんまりですわね……今時のお嬢さんに。

姉 デモ、さうしておいでつていはれるんですもの、かうしてあるより仕方がないわ。

妹 お氣の毒よ、全く。

はる (妹に向つて) それにつけてもお嬢さんお兄様の方はアンナにさげけていらつしやるからあなたは餘程おしあはせですわ……同じ兄弟であつても氣前が違つてもんでせうか。

姉 でも今日は不思議よ。私を押込めもしないし、それかさいつて、私を連れて出るんでもなし。巴里開けて以來の珍事だわね……。

はる アンナ奴、本當に地獄にでも、おつこちればよい業ゴウさらしだわ。

堅 (はるにつきあたり) オツと失禮、あなたがたは、どこへ御ゴシこしになりつゝあるところですか。

妹 まだごとも極めてゐませんけれど、どつかへ行かうと思つてゐますもの……そりや誰だつてコンナ可いお天氣に遊びに出かけないものはありませんもの……昔氣質のわからずやでなければ……ですから私、姉さんにも御一緒に出かけませうつて、勤めてゐたところですからね。

堅 各自は各自に意思すればよろしいから、あなたはあなたでどこへでも勝手に行くが可いでせう。(はるに向ひ)お前もよし子さんと出て遊ぶが可いはる 遊ぶがわるいたつてもあそぶわ。

堅 (こみ子に向ひ) 併しお前は、決して決して出て行つてはならんよ。

新 可いちやないか、富さんだつて、ちつたあ、遊ばしちやごうだ。

堅 ハイ、御親切は辱いですが。

新 ですが……。

堅 私は之を欲しませんからお断りします。

新 さみさんがよし子と一緒にでは何かよくないことでもあると思ふのかい。

堅 いゝえ、併私の妻は他人の妻と一緒に在るよりも夫と共ヲツトに在る方が一層

安全です。出てよろしくば私がつれて出ます。

新 又堅苦しいな。

堅 しかし此女コレの行儀不行儀は私が監督してゐるのです。それに……私は此

女の一舉手一投足ト雖、忽にすべからざる關係があつて近き將來に於ては夫と云はれ妻と云ふべき運命を持つてゐるのですから此女ばかりは私の思ふまゝに躰けたいと思つてゐます。

新 私だつてよし子と關係があるではないか。

堅 さうです。だからよし子さんはあなたのすきなやうになさるが可いです

此女は私の思はくに仕入れゝば可いです。

新 イヤハヤ?

堅 私は女房に浮氣をさせたくはないのです。

姉 テモ私だつて手もあれば足もありますわ。いくら何が何でもチツトは自由にして貰かなくては……。

堅 コレ、何を云ふのだ。お前はだまつてお出で、私と一緒になくちや出

歩くことはならん。

妹 デハ叔父さん、あの姉さまは絶対に散歩しちやいけないんでせうか。

堅 さうです。

妹 ナゼ？

堅 ナゼツて、いけないからいけないんです。

妹 ナゼ、いけないからいけないんです。

堅 ナゼツて、いけないから、いけないからいけないんです。

妹 ナゼいけないから、いけないからいけないんです？

堅 ナゼツていけないから、いけないから、いけないからいけないから……

ア、舌が忙しい……つまり、單刀直入に單簡に手みぢかに云ふならば私は

妻のそばには私だけがついて居りたいのです。

妹 オヤ、箱入奥様ですね。

堅 外の者の悪い感化を受けさせたくはないのです。

はる チヤアかうなさるさ可いわ。お嬢さまに目かくしをして耳かくしをし

て六枚屏風で圍うてあなたはその口にチャンと見張をしてそこを吹いてく

る風まで一々検査して検査済の空氣だけをお嬢さまに吸はせてホ、ホ、。

堅 さうです、それが出来れば殆ど理想的です。けれどもそれは到底不可能

のことでですから、私は出来得る程度に於て嚴密な注意を拂はうと思ふので

す。

新 直ぐアレだ、いくらからかつても向ふは四角にしてからでなけりや相手

にならんのだからな。

姉 因果だれ、コンナ身の上は？

堅 私の思考するところによるさお前は世界のあらゆる婦人中最理想的なる

夫を持つことが出来るのだ……。

四人 オヤ／＼。

堅 世界の何處をさがしても、わし程妻の養育に仔細の注意を拂つてゐるものがどこにあらう。

妹 お蔭さまでハートが正方式になりませうさ。

新 正方形な心は角があるだけに捉はれやすいものだ。隋圓形の心は轉がり易いやうですつがまりにくいものだ、わしは此法でよし子を躰けてきた。

堅 だつて、どうすれば人妻を傷つけることが出来やうかと云ふことを専門的に研究してゐるやうな此巴里の大道へ未來の妻たるべき女を追つ放すこと云ふことは、まるで自ら顔をつき出して「サア泥をぬつてくれい」と云ふやうなもんです。

新 だけど人間の賦性は争へぬものだよ。いくら咲かすまいとしても春が來れば花は咲く、いくら咲かせずゝめても冬の寒中には開かない。

堅 兄さん……そりや何の比論アナロジーです。

新 ダカラサ、お前はそれだけ熱心に思つてゝも、もしかさみ子さんがお前の妻たることを嫌つたらどうだ……。

堅 嫌う、そんなことがあるものですか。親の遺言で私の妻たるべく定められたさみ子は、是非とも私の妻であらねばならぬ。

新 「ればならぬ」と云ふことは、必ずしもさうはならぬと云ふ案じのある時の自分に對する氣やすめに過ぎない、わしはさう思つてゐる、お前の論法でいくならよし子はわしの妻であらねばならぬ、しかし考へて見ると、年も大分違つし、お前のやうなわからずやが在る——ヒヨツと此女がいやだと思ふやうなことがあるまいものにも限らぬ。その時は此女の思ふまゝにどこへでも縁つけて自分は自分でどこからなりとも妻を迎へる、お互はお互の考へを實行するのがよいと云ふお前の主義から云つても此が至當では

ないかと思ふんだが。

堅 い、え今の場合は違ひます。時の東西をさばす、處の古今を問はず……女を外出さしてろくなことはなからず。きれいな物が目につく。ホシイナアと思ふ。美しい寶石が目につく。れだつてやらうと思ふ、立派な男が通る變な秋波ナガシメをする。だん／＼男の箔を剃いで此迄夫が世界一の美男子で大賢人で大富豪でそれにつれさふ妻たる自分は世界一の幸福者だと思つてゐた心イリュージョン想が滅茶々にされて、揚句のはてが何かと云ふと、物れだり、夫婦喧嘩、間男、姦通、夜逃げ、かけおち……あゝあゝ誰かこのいまはしきここの想像に堪へませう。私は敢て断言するに躊躇いたしません。「女と顔面とは外に出すものでない」と。女は夫の箔を剃がし、顔面は縁の箔をはがせます。……さにかく此が私の主義だ。罪を知らない者に罪を教へたり墮落を知らない者に墮落の手引をしたりしないのは流石に多年の學問に

(0 1)

よつて得たる私の幸福といふものです。若い時にこびりついた習慣は容易に脱げないものです。身持を變へんけりやならぬ時になつて、此は面白くない育て方だつたと思つても後悔は先に立たずです。

新 何も身持を變へる必要はないではないか。

堅 必要がない？。

新 ア、。

堅 驚き入つたもんだ……。

新 何がよ。

堅 驚き入るぢやありませんか。あなたがよし子さんを妻とした曉、娘時代同様の自儘氣儘をゆるしますか。

新 ゆるすとも。

堅 舞踊だ何だつて群集の場所に氣ちがひのやうになつて出かけるのをほつ

さきですか。

新 ほつこいたつて可いだらう。

堅 それぢや生若^{ナヤ}い男どもを自家によんで御馳走もしてやるのですれ。

新 御馳走もしてやればそれから。

堅 そいつどもは大騒ぎをやつて、大宴會をおつ開きますよ……。

新 そりや結構だ。

堅 あなたの細君はそいつ等の甘い詞を嬉しがつて聴きとれますよ。

新 さうだらうとも。

堅 あなたは、いやな顔をしなくてそのしやれ男を見てゐますか？。

新 見てゐるよ。

堅 あゝそれぢや可いです。いゝ馬鹿だ……。(さみ子に)内へはいんな、こん

なげがらはしいことをきいてはお前はさんだことになる。(さみ子退場)

(その三) 新助、堅三、よし子、はる

新 私は唯妻を信じてきた。だから此からさても此迄通りでいゝのだ。

堅 妻に不貞腐れたことをされたら嘸いゝ氣味だらう。

新 それも事の成り行きなら仕方がないさ。妻によくないことがあつたさし
ても、妻ばつかりがわるいんぢやない、夫も其一半の責めを負う必要があ
る。少くとも自分を姦夫^{アヒナ}以下のものに思はせるさ云ふのは、夫の罪だと思
ふ。

堅 歳の可い話だ。こんなことを云ふ人があるから世界の女は操の二重取引
をしたり、三重抵當に入れたりするのだ。あなたは女護の嶋へでも行つて
一生その演説をつゞけるさよろしい。

よし子 あなたはあまりに女の人格を無視してらつしやる。こんな方には私
どもどうしても敵愾心を起さないわけには参りません。(新助に向ひ)若も

私、あなたと御縁が定まるやうになりましたら必身持を正しうして御心配なぞかけません。ですけれど(堅三に)もしもあなたのおよめさんにさ云ふことであつたら、私は今何とも申し上げておくことは出来ません。

はる 魚心あれば水心ですわれ。こちらを信じきつてゐて下さる人をだましたりはする氣になれませんわ……ダケド(堅三)アナタ見たいな人は、だましたら、だましとくのやうな心地になります。

堅 チヨツ、失敬な、のけく。

新 怒るまで反省したがよい。妻を禁錮しておくさ云ふのは決して利口なやりかたではないよ……。

さつくりと考へて方針を一變したがよからう。ではこれで別れやう。左様なら。

堅 (口吻をまれて)左様なら、何が左様ならだ。人道の破壊者が、此道心堅

固な我輩までも誘惑しやうたつて、かゝるものが。チヨツ、いま／＼しい人間と兄弟になつたものだ。

(その四) 堅三

獨白 フン、可い相棒だ。棺桶に片足踏みこんでゐながら、女房をあまへかす、大デレ助と、誰にでもベチャ／＼話しかけるシャーシャーの浮氣女スベタとそれにあのあばすれたはるめと、こんな人間を改造しやうつたら、いくらプラトリーやソクラテスが百人程頭を一つにして智慧をしぼりだしても追いつくこつちやない。ア、云ふ人間のはたにおいては折角清浄無垢に育つたあの富子まで臺なしにせられつちまう。さうだ／＼、今の中に早く田舎の知るべに預けて、浮世の風にあてぬやうにするのが上分別だ。

(その五) 三み子の情人守口、堅三、守口の僕留造

守 留造見ろよ、いやな奴があるではないか。オレの戀の關所番をしやがつ

て……。

堅 (自分一人と思ふこなし)かうも世の中が腐敗したさは驚いたことだ。

守 私はきやつに何か話しかけて交際を始めたいな。

堅 (前と同じく)以前は若い者がチャンと四角ばつて行正しい者だったが、
今ではまるつきり變つて、おぢもおくしもせず、ちつとも……平氣で……

守 (少し遠くから堅三に辭儀して)お辭儀してゐるのにキヤツ知つてゐない
のかしら。

留 こつちは見ええのです、アツチ側へ行きませう。

堅 (全上)此處は是非とも去らんけりやいかん、都住居はモウホトく。

守 (だんく近よつて)奴のうちに入出入するやうにしなけりやいけない、私
は……。

堅 (氣がついて)オヤ誰かものを言つてるな……田舎なら今の世の馬鹿が目

につかんから可いて……。

留 (守口に向ひ)もつと傍にお寄んなさい。

堅 何だ……變な聲がするな……ハ、ア、こりや耳鳴りだナ……田舎では娘た
ちの樂みが、極單純で……(守口の辭儀するのに氣がついて)モシく、あ
なたは私に向つてお辭儀をしてゐるんですか。

留 もつとくお寄んなさい。

堅 (守口には構はず)田舎には女たらしもやつてこない(守口又辭儀する)何
だ、馬鹿な奴だ。(ま片方を向く)留造も又辭儀する(此奴もお辭儀するの
かい。何だい馬鹿々々しい。帽子をまったり被つたり)。

守 あなた、お邪魔して相済みませんが……。

堅 成程、私にはお邪魔です。

守 實はもう以前から、御交際を願へたら、どんなにありがたからうかぞ存

じてぬましたので。

堅 さうですか、何ぞ有がたいことでもありますか。

守 あなたの仰は謹んで奉るのでございます。私卒直に申し上げます。

堅 卒直、甚よろしい。餘計のお世辭はお互の時間つぶしですから。

守 私はあなたのお隣に居ることを此上なく光榮と存じて居ります。

堅 なるほど。

守 時にあなたは只今宮中で評判の例の一件を御存じていらつしやいますか

……あれは本當だと申しますね。

堅 い、え一向知りません、又知る必要もありません。

守 御尤……ですが此人間と云ふものは得てして好奇心にそゝられて、こわ

いもの見たいし、知らないことはして見たいしと云つたやうなのでしてね

……あたは此度皇太子が御降誕になつたら祝賀にお出かけでせうね。素適

に盛なものださうですが。

堅 さうですか、行くかも知れませんが行かないかも知れません。

守 トハ又どうして。

堅 御互に未來のことはわからないぢやありませんか。

守 なる程未來は。

留 これからさきのことで。

堅 わからない。

守 イヤ、あなたの賢明なる味ひある御ことばにはほとく感心いたします

堅 サアその感心するのがすんだら用件をいつてもらひませう。

守 ハア卒直に申上ます……が、どうです此巴里といふところは……流石全

歐第一の大都會だけあつて毎日日にち色々さかばつたおもしろいことが湧いてまわりますね。アナタなどは此頃何をいらつしやいます。

堅 私は私の仕事をやつぬます。

守 併ちつこは、氣のぼしをなさる必要もございませう。……夜分なんぞおやすみになるまで何をなさるのですか。

堅 私の勝手なことを致します。

守 ハ、ア成程、おすきなことを……イヤ此も至極御尤です。そこで夜分費方があまり御多忙でいらつしやらなければ、チヨコく御邪寃にあがつたり来ていたゞいたりしたいのですが。

堅 私の本分を缺かさない範に於て或はあなたの御希望を充たすことが出来るかも知れません。

守 あなたの本分を仰つしやるさ。

堅 私の本分は即私の天職です。

守 それは、わかつて居ります。が、あなたはどんなことを以て天職として

わられますか。

堅 それは勿論です……。

守 何が勿論です。

堅 私はあなたとは違つて未來の妻を持つてゐます。

守 ハ、ア、さみ子嬢のことですか。

堅 勿論です。アを保護して完全に女にしあげるのが私の天職……即私の本分です。

守 オヤくオヤくオヤく、こりや一べん眉毛をふいてきませう、イヤハヤさんだお邪寃をいたしまして。

堅 テ御用事は。

守 イヤ又お伺ひします、あなたの御本分で少なからずあてられました。

堅 それぢや早くお歸りなさるが可いです。

守 ぢやお暇申します。

堅 ハア左様なら。

堅三退場

守 お前は一體あの變てこな奴をどう思ふ。

留 全く變ですれ、にべも愛憎も爪の垢程もありませんね……、随分ひどい
めにおやられなすつたね。

守 え、業腹だ。

留 如何なすつたんで。

守 如何した？己の可愛い女が、アンナ頑つく老爺に頑ばられてゐるかと思
ふさたまらないな。

留 それがあなたのおしあはせと云ふものです。亭主があゝまでへまリつく
と女は却て嫌氣がさすものです。

守 妻の香つきを以て自分の天職さ心得てゐるさは驚き入つたぢやないか。

留 動あれば必ず反動ありでサ、亭主があれだからさみ子さんの方ぢや心で
八十度のカブリをふつてまサア。そこへもつていつてあなたがうまく手管
をおつかひになる、まるで霧中に物を探るが如しです、成効疑ひありませ
ん。

守 だけど、おれが彼の女に惚れかけてからもう四月にもなるのに、その間
一言半句だつて口をきくひまがないのだから情けないではないか。

留 戀すれば人は賢くなるさ云ひますから、アナタも、ちつと賢い分別をな
さるがよろしい。アレだけの頑敵ですから追手から攻めるのは不利益で
からめてから攻めれば一べんでせう……。

守 だつて手も足も出しやうがないではないか、あゝして奴がサツと本分呼
はりして張番してゝは。

留 そこでアツチのお嬢さんは、まだアナタが惚れていらつしやるてえことを御存じないんですか。

守 サアそれがどうも解つてるやうにもあり、さうでないやうにもあるんだからたよりないんだよ。彼女が奴と出かけるたんび、己はかけのやうに、あそこをつけて目つきと口つきと鼻つきと顔つきとおまけに、あらんかぎりの秘術を盡した仕草まで、充分己の心がよめるやうにしてあるんだが……一寐己の目は充分ものを云ふつもりなんだが。

留 ヤヤ、一寸やつてごらんなさい。

守 ナニを。

留 色目をでサ。物を言ふか言はんか實驗してあげますから。

守 馬鹿をお云ひでないよ、何しろかうなつてはぢれつたくて仕方がないよ。何とかよい智慧をかしてくれんければ……困るよ……。

留 ぢや又何とか考へますが、マア家へはいつてゆつくり智慧袋の隅をさがして見ませう。(幕)

第二幕

(その一) きみ子 堅三

堅 さうだ、彼家(ウチ)はもう知つてゐる、彼の男も今お前に聞いたから直ぐわかるだらう。

き (旁白) あゝどうぞ好い都合にいけばよいがねえ、全株あの方と私とのなかは清浄(キレイ)なのだから、この計畫がドン／＼進行すればよいが。

堅 お前、その男は守口(ウチ)といふさうだといつたね。

き えさうです、お宅はどこか存じませんが。

堅 可い、おれがチャンと知つてゐる、昨日己の本分をきいて驚いて歸つた、隣のやつだ……心配せんでも可い、己が直ぐ行つて、サツバさうら

んにやつつけてやるよ。

さ え、どうぞうれ……(よこを向いて小聲に)どこまで頑かまばつつけてゐるんだらう……デモ私みたいな箱入がこんなことをするつて本當に大膽になつちやつたわ、だつてこんなひどい目にあはされてゐるんだもの、解つた人が聞いたら誰だつて尤だと言つてくれるわ。

(その二) 堅三

堅 サアおくれとはいけない……こゝだ、(守口の宅の戸をたゞいて)

モシ、モシ、モシ、……ア、誰が出てくるかな、何をきつかけに言ひ出してやらう。モシ、御免なさい、御免なさいよ。……め……ん……な……い……よ……つて……、かう云ふわけがあるもんだから奴めあんなお世辭をつかひやがつたんだな。ヨシ、見て居れ、今に返報してやるぞ、いんまに見て居れいんまに、アモシ、モシ。

(その三) 守口、堅三、留造

留 サアやつてきたぞ、もう少しぢれさしてやれ。

堅 モシ、モシ、ごなたがお居ですなら、モシ。

留 アーイ、うるさいな(と飛んできて堅三にぶつかる)

堅 何んだ、がらくた野郎、いきなり大きなごんがらを投げ出しやつて、ぶつかりやつて、危くころがされるどころだつた、チョツ馬鹿め。

守口靜に出て

守 いや失禮でした。

堅 あゝあなたに用があるのだ。

守 ハ、ーン、私に？。

堅 さやうあなたに、あなたは守口さんでせう。

守 ハさうですよ。

堅 御面倒か知らんが一寸話したいことがあつてきました。

守 ハア成程、いえどう致しまして、何か私で御間に合ひますことなら決して御遠慮なくどうぞ、仰つしやつて下さい。

堅 ハア御遠慮はしません、ナンで遠慮なんぞするもんですか、併し御用に立つて貰うんでもございませぬ。少しあなたに談じておきたいことがあつてきたのです。

守 私の宅へ……談じておきたくて……。

堅 ハア、あなたの宅の此へやへ……只今……だが何をさう驚きなさる？。

守 いや驚く譯があるのです、あなたから態々膝を枉げて御來訪を載くご云ふことは實に名譽だと思つて、私よろこびに堪へないのです。

堅 ナニ、名譽だつて、冗談はおいてもらひませう。

守 サ、マア何卒おはいり下さい。

堅 それには及びませぬ。

守 テモさうは仰しやらすさ、どうぞあなた。

堅 いんにや一足もこゝは動きませぬ。

守 だつて、こゝぢや、お話も伺へませぬ。どうか……。

堅 一足も動きませぬ……。

守 左様でございますか、ぢや致し方もございませぬ……オイ留造、腰掛を持つてきな、早くだよ、こゝの方が可いさ仰しやるから……。

堅 イヤ腰掛どころの騒ぎぢやありません。立てり話をしませう。

守 え、大切のお客様を立てらしたりなんどしては、私が濟みませぬ。

堅 イ、ヤ、く、私の自由意志で、腰かけないで話するこゝろを欲します

守 テモ、それぢや餘りひどい失禮で、主人の私が恐縮致します。

堅 併お話があるご云ふにお聞き下さらないのは尙以て失禮ではありませ

んか？。

守 御尤様、それぢや、やむを得ません、それではお話を伺ひませう。

堅 左様、それが可いのです、(互に帽子を被るのをためらうてゐる)そんな堅いことは實際要らんです。サお聞き下さるか、下さらんか。

守 エ、伺ひます段ぢやございませぬ。

堅 私は、私の本分を守りたいと思ふんです。

守 あなたの本分の天職のさみ子嬢の監督でせう。

堅 サウです、あなたはえらいよく御存じだね。

守 此は皆あなたから伺つたことなのです。

堅 そしてあのさみ子は私の未来の妻だ云ふことも承知してもらひたいのです。

守 成程あなたの未来の奥様で。

堅 そして他人の妻にすることが出来ない云ふことも、

守 ハ、成程。

堅 そして、その所謂他人云ふ中には少くとも否、是非ともアナタも含まつてゐるさいふことも承知しておいてもらひたい。

守 それはモウあなたの奥様はあなたの奥様で、私の妻は私の妻です。

堅 ナンダトアナタの奥様がわたしの妻でわたしの妻があなたのナンダと。

守 早合點をされちや困りますよ、くりかへして申しませうか、あなたの奥様はあなたの奥様で、わたしの妻はわたしの妻で、妻はわたしの者で奥様

はあなたのもので、あなたはあなたでわたしはわたしで、あなたの妻はあなたの妻で、わたしの奥さまは、ホイこりやヤ、こしい。

堅 まぜつかへしちやいけない。で。あのさみ子は私の未来の妻で……。

守 ハア私の未来の妻で。

堅 ナニチ……。

守 イエサあなたから云ふと、私の未來の妻でとお云ひなさる方で。

堅 サウ／＼としてもう一つ承知しておいてもらいたいことは。

守 ハア承知しますことは。

堅 あの子は一寸美人でせう？。

守 お惚ホけはよして下さい。

堅 イヤ冗談ぢやない、それだから……。

守 それだから何です。

堅 アナタは、あれに惚れることはやめてもらいたいのです。

守 私ですか。

堅 ハ、あなたがです。何も知らん顔をなさらんが可い。隠れたるよりあらはるゝはなしです。

守 富子さんに私が戀をしてゐるなんて誰が申しました。

堅 誰と云つて氏名は今私が申すべき限ではありません。が、確と思つて差支へないものが云つたと云ふことだけは確だと云ふことだけは斷言して憚らないです。

守 ですが、併、誰です。

堅 愚妻です。

守 さみ子嬢ですか。

堅 ハアさうです。

守 變だナア、そして富子嬢はもうあなたの愚妻ですか。

堅 イヤ此は失言いたしました、愚妻になりかけの富子自身が、さう申したので、此程確實なことはありません。

守 愈々をかしいなあ、さみ子嬢が自分で云ふなんて？。

堅 ハイ自分で、解りましたか。あれは幼い時から私が好きで、ちゃんさ身上一切を私に托してゐるのです。で、彼女がどこへ出かけていつてもあたはきつと後をつけておいてになるので、失禮なことをする人もあるものだが、大層立腹してゐます。それであなたの目が話すことばは能くわかつた。あなたの胸の中は明らかに知れた。此上あなたのお心を見せてもらつたりする必要は毫頭ない、ないどころかそんなことをされるに彼女が私を思ふ心のさばりになるから、今後は目で物云ふことも、そぶりて妙なことをしかけることも一切中止してほしいつて、かうあなたに傳へてくれさせたのまれたのです。

守 それぢや、富子嬢はそんな御自分のことで貴方を私のまごころへお遣はしになつたのですか？

堅 さうです、全くさうです。

守 それ本當ですか。

堅 くごくお問ひになる必要はないです。あなたは彼女に夢中になつてなれるから實に困るが、若もこんな使を安心して頼めるものがあるなら、彼女は疾の昔にその所存を貴方に知らせたいと思つてゐたのです、併こんな秘密を彼女のやさしい胸一つに、秘めておくことは、さても堪へられんで到頭私に頼んだのです。今も云つた通り彼女は全くこの私を慕つてゐるし、私も又勿論彼女を愛してゐる……つまり相思の仲さ云ふのですね。で彼女の顔はモウ充分御覽になつたことだから、あなたに若も男らしいまごころが爪の垢程でもあつたら後をつけまはすアノ見苦しい片思ひの所作はテツキリやめてもらひたいつてかう云ふのです。お話を云ふのはこれだけです、テハ失禮、何れ又。

守 留造一體これはどうしたと云ふのだらう。

堅 (歸りつゝ) 彼奴驚いたらうて……。

留 何も旦那失望なさることはない。此には何かも一つ深いたくみがあること、思ひます。こんな使ひをよこすことは、心からあなたを嫌つてゐる女のすることぢやないと思ひますが。

堅 奴の自棄自得さ、かうなつてきたのもエへ……。

守 デハお前はこれを有望な意味に解するのだね。

留 さうです、マア奥でくはしく申しませう。(兩人退場)

(その四) 堅三

堅 どうだ、アノ驚いた様子つたらありやしない、こんな使ひを貰はうさは全く意外だつたらうよ、さみ子と呼ばう。己の教育方法シツケカタはごんなものだ。一寸男に顔を見られるだけでもブリ／＼するなごはよくも女の嗜みが見わたつたものだて。

(その五) 富子、堅三

さ (獨言) あゝ私心配でならないわ、あの方、ア、夢中になつていらつしやるんだから、あゝ言つてあげた私の心を覺つて下さるかしら、もつとよくわかるやうに露骨にもう一度お知せしなけりやいけない、私かうして縛られてゐる身ぢやあるけれど、何さかして此胸のありだけをお知らせしたいマア何たるいさしい方だらう、ア、／＼何ぞよい方法はないかしら……。

(此間に紫鉛筆を走らせて顔に手紙を書く)

堅 歸つてきたよ。

さ 如何でした。

堅 巧く言つた、てつきり巧く言つた、奴もアレで思ひきつたらう。初の中はそしらぬ顔をしてゐやうとしてゐるらしかつたが、私にこの傳言をたのんだのはお前だと言つたら、キャツびつくりして物もえう言はなかつた、

二度さモウ手出しはしないだらう。マア何たる痛快なこゝさだらう。

さ オヤサウ、でも私何だかまだ恐しくつてしやうがないんですよ、ナセツて彼の人には、なか／＼の色事師ですもの、今後まだ／＼どんな難題を持出すかも知れせんわ。私何だかそんな気がして恐くて仕様がありませんのよ。

堅 どうして……モウ大丈夫でないか、何ぞ気が／＼りのことがあるならお言ひ……。

さ 私小父さんだから何もかも打あけて言ひますがね。小父さんがお出かけになるさ直ぐ私少し風に吹かれやうと思つて窓側へ出ましたの、さうするさ角のころを若い人が曲るやうだなと思ふさ、その人は真直に私のころへきて、不意に「今日は」つて挨拶をしながら鬨書を結んでホリ込みましたのよ。私はハツと思つて大急ぎで其手紙を投げ返しちまうさする中、

早やかき消すやうにツイさどつかへ行つて姿が見えませんの、私マアこんなこゝさをされてどうしたら可いか恐くつて仕様がないうですわ。

堅 チョツ、失禮千萬な野郎もあつたもんだナア。

さ 其でその手紙を直さま、そのいやなうるさい奴に返すのが道だと思ひますか、それを返しに行つて戴くの誰か……小父さんには毎度お氣の毒だし……。

堅 ナニ可いさもお前、これほごまでお互に愛しあつて居るお前さわしこの仲ではないか、夫婦は異身同心だ、それでこそお前が私を慕ひもし又信じもし、してゐる證據にもなるのだから、その使はしてやる段ぢやないさもそれでこそ、私は言ふに言はれず嬉しく思ふのだ、ドレおかし。

さ それでは……にございますから。

堅 よし／＼、奴、何を書いて來やがつたな、ドレ一寸よんで見てやらう。

さ アラ、小父さん開いちやいけません。あけちや大變ですから。

堅 ナせいけない。

さ だつて。

堅 だつて何だ？

さ それぢや小父さん、そんなことしたら私がしたのだと思はれてよ、それでも可くつて？おさなしい女は男の附文なんごよみたがつちやいけないでせう。そんなことをするさ、色戀を内々娛しみにしてゐるつて云ふ。アノ飛んだお轉婆だと思はれて私の立ち場が、つらくなりますわ、ですから、此手紙はかう封をしてあるんですから此儘直ぐあの人に返す方が可いと思ひます。さうすれば私がアノ人のことをテンテ思つてゐないさ云ふことが一層よくわかつてよろしからう、これで全く戀の望みをなくしちやつてよ、り早く絶望の結論を彼に味はすることが出来るさいふものです。

(70)

堅 成程此は名論だ、あゝお前は實にやさしい、おさなしい、露程のけがれのない見あげた女だ、此さ云ふのも私の育て方の精神が全くお前の腹の中に根づいて了つたからだ。それでこそ天晴れ私の未來の妻だ。

さ だけでも、小父さん私は小父さんが爲さらうさなさることを少しもさまたげる考へはないんですよ。手紙は現に小父さんの手にあるのですから、お開き下すつても可いことよ。

堅 いや／＼そんなことは萬々決して致しません。必このまゝ持つて行かうお前の云ふ理窟がテツキリ正當な論理にかなつてゐるから……テハいつて來やう、それから私はある人に一寸話があるからナ、その用談がすみ次第直ぐさ、さんでかへつてお前を安心させることにしやう。(富子退場)

(その六) 堅三

堅 (獨白)此程あれが自分を信じきつて、なつかしがつてくれるかと思ふさ

(71)

實に嬉しくてたまらん、背中がゾク／＼するやうだ。全く彼女は我家の名譽さすべき寶物だ、戀のいの字にすら彼女は眞赤になつて怒つてゐる、色文一つを此上なしの無禮のやうに思つて、己が手を経て返させるのだ。兄の後見をしてゐるあのよし子がこんなことに出あつたらどうするだらう、見てやりたいものだ。如何だ、娘の教育は教育する人によつてかうも違ひが出来るではないか。あゝ氏より育ちなる哉だワイへ、い、い。

(守口の宅へ行き戸をたたく)

(その七)

堅三、留造

留 何でございます。

堅 サ、これを返しますから受けとりなさい、そして以後は色文など書いて人の居る窓からホリ込んだりしやうなどは思はんが可いと旦那に言つきなさい。富子は此事を大變立腹してゐる、よく調べて見なさい、封じめ

はちつとも切つても見なかつた。さみ子はこの主人の色戀を如何思つてゐるか……事が成就するものかしないものか、これで判断して見るが可いのだ。

(その八)

守口、留造

守 一體キヤツ奴、なにをお前にわたしたのだ。

留 この手紙をあなたがお嬢さんにお上げなすつたんで、それを嬢さん大變怒つていらつしやるさ申しました。封じめ一分も切らないでお返しなすつたんださうで、早くよんで御覧なさい。私の推量が當つてゐるかゐないか、直ぐわかります。

守 (手紙を開いてよむ)

「あなた、こんな無賤な手紙を差上げてまして嗚々お驚きのことだらうと思ひます。又こんなことを認めて、こんな危険な、而もあばすれた方法でお届け

申す私は嘸大それた女だと思ひでせう、だけご私、今そんなあさきをかばつてゐるだけの餘裕もろく／＼持たない身の上なんです。ナゼか申しますと、厭な厭な厭な婚禮……強制的の婚禮が一週間と云ふまぢかに迫つてゐるんです……私、何さかして此苦しみをのがれたいんですが、イヤと申して外にたよる人もない私ですから、色々と思案にまつをいつ結句あなたにおすがり申すより外手段がないと思ひました。と申して私は、こんな事情がなかつたら、あなたにもたれる女でないとは思つて下さいませ。實は疾くの昔から深く／＼お慕ひ申してをりました。私がアノ牢舎にひさしい部屋の窓ぎはに身を凭せて外面の景色を見わたしてゐますとき、スツとお通りになつて、チラとこちらをお向きになるあの優眼の一瞥……ア、私にまつてはそれが強い／＼キュヒツトの箭でした、かやうな蓮葉なことを申すのも、皆、切ない此胸の云はするせいと、不惑に思召して、ご

うが行末ながく御見捨て下さらぬ様、切に／＼お願ひ申します。私はモウ私の凡てを心からなるあなたの御膝下に献じたいと思つて居ます。私の美しい金髪も、やさしい瞳も、白い腕も、薔薇色の顔も、なめらかな肌も、無垢な乙女心も、君故ならば……と思ひつめてゐます。事は已に一週間と云ふ、目睫の間に迫つてゐます。セコンドは遠慮なく刻んでまゐります。あなたはもし私の切ない心をお汲みさり下さいませならば、一時も早く私の身のふりかたについて考へて下さい。私はチツとも早く此牢舎を脱けて戀しい／＼あなたの御傍につかへて、妻と呼ばれ、夫と呼んでスヰートな生を味つて見たいと思つてゐます。」

留 どうです、こりや色事師のレコトド破りで、計畫が全く嶄新奇抜ぢやありませんか。あんな若いうぶなお嬢さんでも、戀は曲物なが／＼際どい術をおやんなさいませぬ。こんな巧者な放れ業が出来やうとは、……實に色

は思案の外ではあるわい。

守 全く、恐れいつちやつた。こりやたしかに向ふの方が役者が一枚がた上^{ウハ}手^テだわい。かう伶俐なことがわかつちや益々惚れざるを得ないナア。

留 かつがれ男がやつてきました、無闇なことを仰つしやらないやうにお氣をおつけになるがよろしい、最後の勝利が肝腎ですからね。

(その九) 堅三、守口、留造

堅三 華美な衣服を着ちやならないつて、結構な禁令が下つた、四月廿日附勅令第三百二十一號だ。良人たるもの、苦しみも最早大したこともなからうし、人の妻も馬鹿な無理れだりをせないだらう。かう云ふふれを出して下すつたお方は有がたいお方だ。此上に衣服同様弄媚^{イチヤツ}も禁止になれば可いかなあ……、さうすれば全く亭主助けた、己は富子がアノ美しい聲で高らかによんで自分にきかすやうにと思つて此を一部買つてきた。これはあ

れの晚餐後仕事をすましてからのよい腹ごなしだ、(守口を見て)ヤア色男又文を金の箱に入れて、投込む考へかれ、お前さん屹度何だらう、わるさのすきな浮氣娘さか、り合をつけてお前さんの甘つたるい醋化淋たつぷりの言葉た、諾と言はさうと思つてゐたらう、だがどうだ、世の中は得てして騙の嘴だ、喰ひ違ひ易いもんだ、どうだお前さんから贈つたものは、みじめな目にあつたではないか、お前さんはれい、い、かい、全く何の驗もなく、汗水垂らしてゐなさるのだ、富子は堅いのだ、私に首つただけだからお前さんに尻を追ひまはされるのを怒つてゐるのだ、どこか外を探すがよい。ねえ、そして何處へでも行つてしまふがよい。

守 ハイさう致しませう、今日と云ふ今日、私も戀には懲りました、仰つしやる通り全くお嬢さんのことでは、あなたの御心勞は大變なもので、随つてお嬢さんは當然あなたの物であるべきであつたのです。と云ふやうなこ

さであつて見ると、到底私の及ぶところではありません。たとへいかほど私が真心を盡しても、さみ子嬢の一件であなたと鞘當をしやうていのは、こりや私の方が正氣の沙汰とは申せません。

堅 さうとも、さうとも、全く正氣の沙汰ぢやない。お前さんも大分悟りが開けてきたね。

守 若しあなたと云ふ恐ろしい優勢な方が自分の戀の仇だと云ふことを前以て存じて居りましたならば、私は決してコンナ散々な目に會ふやうなことは敢てしなかつたのですが、あゝ知らぬことは云ひながら、情けない破目になりました。

堅 さうだらう。誰でもお前さんのやうな破目になつたら、お前さんのやうに云うて歎くだらう。

守 モウどこにも取りつく嶋はテンデありません。今更愚痴はこぼさずと、

サラツと此はあなたにお譲りしませう。

堅 それく、それに限るよ。

守 道理は十二分にあなたの方にあるのです。色々尤と思ふ節があなたのからだにあるのですから、悔むのは私の愚痴と云ふことになるだけで、ちつとも私の男振をあげることはなりません。さみ子嬢があなたにお心をお寄せあそばすと云ふのは、成程聞いて見りや一々御無理御尤なこと、思ひます。

堅 そりや今更云ふまでもないことさ。

守 ハイ、だからモウ甲^{カブト}をぬいであなたに譲りますが、併かう云ふ情ない成行になつたのも、もさくあなたと云ふものがお在りなさるからです、どうぞうお願いします。せめても一片の御憐愍を以て富子嬢におこづけを願ひます。この三月以來の、私が貴嬢に對する戀と云ふものは、それはく

清淨潔白なもので、淫^{ミダラ}な心は決して／＼持つてゐなかつた、あなたの立派なお心にさほるやうな考へは、これつばかりも抱いてはゐなかつたのですつて、左様御ことづけを願ひます。

堅 よろしい、それ位のごきは叶へてあげてもよろしい。

守 私は只もうこの心構を満足させる氣ですからお嬢さんあなたにそれだけの心がなくて清い汚れない私の情をあなたと云ふ、さても打克つことの出来ないものに、邪魔をせられなかつたら妻にしたいと云ふのが私の明けても暮れても唯一つの望みでした。

堅 ハなるほど、なるほどさうだらうさ。

守 そんなことがあらうが私、決してお嬢さんを忘れるなど思つちやいけません、ささうお傳へ下さい。よし神の御心はどのやうにもあれ。私最後の息を引き取るまで、いつも、お嬢さんのことを思つてゐますと、さうお嬢

さんにお傳へ下さい。つまりですネ、あなた、あなたはこれだけの結構な報酬をお受けになっただけの功勞がおあんなさるのですから、その爲にこそ私はあきらめにくいことをあきらめて、思ひきれもせぬことを思ひきるのです。

堅 さうお話をきいて見ればお前さんも大變よくことがわかつてる。よろしい。これから直ぐ歸つてお前さんの意のあるところは私からおちなく富子に云つてきかせませう。それはきかせても、私がことづけるのではあるしお前さんが心のどん底からの懺悔でもあるしするから彼女も、怒らないでよろこんできくであらう。いや、私が是非によるこんできくやうに話してきかせる。あゝ、あゝ、美人薄命戀無常と云ふが、富子は幸福であるにも拘らず、お前さんの戀は無常であつた、美人幸運戀無常かな、ハ、ハ、ハ、併モウ／＼今日以後彼女を慕ふことは絶対にやめた方がよろしい、ハイ。

デハ失禮左様なら。

留 安本丹野郎何云つてるんだい。自分で自分の悪口を云つてよろこんでらあ。

(その十) 堅三

堅 (獨白) マサカあれ程に思つてゐることはオレも思はなかつたが、ア、段々さ、えりわけをきいて見ると、かあいさうなもんであるな、だが、早くから己が攻めおとした砦をば、奴さんが横取りしやうとしたのが、あやまりなのだ。戀の勝利者、スウィートホームの實現者、テモおれは仕合はせ者だわい。(さ自家の戸を叩く)

(82)

(その十一) 堅三、富子

堅 やつ、けたよ。思ふ存分やつ、けたよ。奴さんの驚きつたらありやしな。封もきらずにオレがソラツてつき返してやつたものだから、奴さんは

愈々失望のどん底に落ちまつた。併モウ到底駄目だとあきらめたさ見えて此上別に何事も申上げることばございませんけれども、たつた一言お嬢さんにかう言つて傳へておいて戴きたい……自分はこゝ數ヶ月晝となく夜となく、あなたを戀ひ慕つて居りました。併私はあなたの名を汚すやうな考は毫頭ありません、若も堅三さんと云ふあなたの二世かけての良人がないのならば、あなたを私の妻にしたいと云ふのが唯一つの望みだつて、此様にお傳へ下さい。尙又かう云ふこともおぼえておいていたゞきたい、私は臨終に最後の息を引きとるまであなたをいさしく思ふ。今あなたのことを思ひきるのは、堅三さんには當然お嬢さんを自分のものにする功勞があるからです——さ、此二件が奴さんからのたのまれたお前への言付だ。これを聞いて見ると奴も滿更の色悪ではない。私は寧可愛相になつてきた、左程までお前を思ひつめてゐたのかと思ふといさしくなつてきた。唯その思ひ

(83)

つめやうが、此わしより少々ばかり足らなんだゞけであつたかも知れぬ。が、さにかくお前も今云ふたゞけのことは淑女たるの面目を保持していくのに何の差支もないことなのだから、快く承けてきてやつて下さい。

さ (旁白) それぢや丁度テツキリだわ私の思つてた通りだわ、そりやあの御様子で、あのお方の清浄なお心がけ私ばちやんと知つてたわ。

堅 何だト?

さ ねえ私ね、いやで仕様のない人を小父さん氣の毒だなんて思ふことが、あるものですか、小父さんが、私を思つて、下さるのが本當なら、アんな戀を仕かけられて、私がドンナに悔しく思つてゐるか云ふことも思つてみていたゞきたいと思ひますのよ。

堅 けれども先方では、そのお前のこゝろをまるきり知らないのだ。それに、さく、正直一遍の無邪氣な戀だから、何もソナナニ……。

さ エ、そいぢや、陶底正直なところがあるから私を伴れて逃げやうと云ふのですか。小父さんの手から私を奪ひさつて、無理に私と同様にならうと
してゐるのが立派な人のすることですか、そんな恥をかゝされて私だまつて可い氣になつてゐると小父さんはお思ひですか。

堅 ナン、ナン、ナン、ナン、何と云ふのだ。

さ よく詭計をするアノ方は、私を奪ひさつて逃げるつて魂膽の最中ださうです、小父さんと私とが婚禮することは、私漸と昨日小父さんからきいたのですのに、如何な秘密な術をつかつて婚禮が、一週間のうちにあることをあの人は、聞きこんだか知りませんが、小父さんと私とが、儀式をあげる、その日取を最早丁と知つてゐるさうです。

堅 ヤア、そりや大變だ、そいつは可けない。

さ アア御免なさい、小父さん、あのお方は大變正直な方で唯モリ私はソツ

コン……。

堅 冗談いつちやいけない、ソンの詭計があるとは今始めて知つた、矢張あいつは、惜い奴だ。

さ アノ人が、かう云ふ馬鹿なことをするやうになつたのも、つまりは小父さんアナタがあまりお人よしだからですわ。テスカラ今あの方をひどく叱つて下すつたら小父さんの怒つていらつしやることも又私の嫌つてゐることも解つてこわがるでせう、自分のいたづらをふれまはつて、私をびつくらさせのは、私がアノ失禮な艶書を返してからのことですわ、あの方はマダ私がアノ人を思つてると思つてゐて、そして私は色々考をめぐらして小父さんと婚禮するのを、よさう／＼としてゐる、小父さんの手もさから、脱けるのを、私は焦れてゐると云つてるさうですわ。

堅 奴、また氣違ひになつたのだナ。

さ あの人、本當に平氣な顔をしちや居ますが、きつと小父さんをコッソリ騙すつもりに違ひありませんわ。綺麗なあきらめたらしい辭を並べて、あなたを胡翫化してゐるですよ。屹度、私これでも何さかして無缺點ムキヅでゐたい女を迷はすやうな奴の言ふことははれつけてしまひたい……と思ひつめて一生懸命になつてゐるのに、そんな人を馬鹿にした術ナにかけられなきや濟まないのかと思ふさ……私ほど不しあはせな者は本當になくなつてよ、小父さん……ネエ小父さん、何さかして下さいナネ。

堅 いゝよ、いゝよ、心配しなくともいゝよ。

さ ネエ小父さん、本當によくつて、ソンの失禮なことをアノ人がしやうさしてゐるのを、小父さん本氣になつて怒つて私を救つて下さらなきや、私もう何も彼も構やしないわ。どんなひどいことをしてゞも彼奴に辱しめられないやうにするわ。

堅 オ、よう云ふた。ダがお前そんなに心配することはないよ。子富子……ちやん、富ちやんてば……私が叔の宅に行つて、モウ一説法してやるから。

さ 本當にお願いですよ、小父さん……私の名譽は即あなたの名譽なのでせう。

堅 お前の名譽はわしの名譽、さうとも、さうとも、その考へをお前が持つてくれるやうになつたらわしの女子教育は萬々歳だ。

さ そんなことは知らぬ、なんと言つても駄目だと云つて頂戴よ、ネ、小父さん可くつて？、確かなところから彼奴の企計は聞いたんですから……そして以後もうあの人がどんなことをしたつて、私驚ろきはしないと云つて頂戴。何分大急ぎでね、私が小父さんを思つてるのはどれ程だと云ふことを聞かしてやらなきやいけません。そして詰らない目にあひたくないな

らあの人が仕やうとしてゐることを早く仕ちまはないさいけないとね。

堅 ヨシ、ヨシ、ヨシ、ヨシ、云ふてよいことはみんなわしが云つてやるからネ。

さ エ、言つて下さい。だけど如何にも眞面目だと云ふことを見せなきやいけないことよ。

堅 決してヘマなことはやりやしないから、そんなことは安心するが、い、デハ行つてくるよ。

さ 私、小父さんが歸つてらつしやるのをサーツと待つてますから、何卒大急ぎでネ、一寸でも小父さんのお顔が見えないと、私心配で心配でならぬんですから。

堅 い、よ、い、よ、お前取越苦勞をしちやいけない、可愛い富ちやんだねナニサ一飛びに飛んで歸つてくる。(こみ子退場)

(その十二) 堅三

堅 (獨白)ア、あんな美しい優しい、そして賢い女が世界に又二人あるだらうか。幸福だナア此己は……己れの好みに仕立てた女房を持つて、實によく嬉しい己は、さうだとも、女はあゝあるべきものだ、己の知つてゐるあのよし子のやうなのは、あるべき筈の女ぢやないのだ——男に飽をねぶらされて夢中になつて、お亭を巴里中の笑ひ者にさせる浮氣者などが女と云へるものが、(守口方の戸を叩き)ハイ御免よ、オィ亂暴男、オィ——變チキ男、色男、一寸話があるのだ、こゝあけてくれ。

(その十三) 守口、堅三、留造

守 オヤ、又いらして下すつたんですか、シテ又何でお出でになりました。

堅 お前さんの馬鹿なことで來ました。

守 エ、何と仰つしやいます。

堅 ちゃんとお前さんには解つてゐさうなものだ。實を云ふとお前さん、もう少し考へのある方だと、わしはお前さんをチト買ひ被つてゐましたわいお前さんは口で上手なことを云つて私を笑はしながら、腹の中ぢや馬鹿なことをやつてゐるのだ、チエ、よくお聞き、私は近所のことでもあり、先程のこともあり、根が正直な男でもありするものだから、お前さんを親切にしてあげたくつて仕方がないんだ。けれどもお前さんのやうなわるい心を持つてゐる人は親切にしてあげたくても、してあげるわけには行かんではないか、お前さんのやうな立派な方が、あんな企をして身持の正しい娘をそののかして、あれが一生の幸福になる婚禮の邪魔するなご……お前さん、それでも良心に反みて疚ましいとは思ひませんか。

守 エ、エ、エ、ダ、誰がそんなことを云ひました。途方もないことだ、途轍もないことだ、途方途轍もないことだ、誰です、ソシなことを云

つたのは？……。

堅 胡麻化しなさんな、さみ子から聞いたのだ、彼女の心持は最早十分お話ししてお前さんにはよく解つてゐなけりやならぬ答だ。あれの名譽は即ちりも直さず私の名譽なのだから、ソナナ不埒なことをたくまれちや、私もだまつてゐるわけには行かん、そんな無禮に會ふよりか、寧死んだ方がましだ。サウ〜いつまでもいつまでも蛇のやうに嫌につきまとはれちやたまらぬから、そんなことは全然思ひこままつてしまう方がお前さんの爲だらうつて、かう富子に言傳をされてわしはやつてきたのだ、これがこつての最後で、又わしがお前さんに口をきく最後で、さりも直さずお前さんに對する戀の絶望の宣告なのだ。

守 モシ只今伺つたことが眞實なら、私の戀は全く望みがないと申さなければなりません。そのお言傳で絶望と云ふことがすつかりわかりましたから

さみ子嬢の宣告に服従せなければなりません。

堅 もし、と云つてお前さんはまだ疑つてるのだね、……そんなことをされちや大迷惑だからと彼女が云ふから、それをお前さんに傳へに來たのだがお前さんは又それを嘘か疑つてるんだね。彼女の口から直接に彼女の所存をききたいのだらう。それならわしはよろこんで其やうに計らつて、私のいつはりでないことを確め、又お前さんの了簡違ひをも明瞭にしやうと思ふ、マア一つわしの後から跟いて來なさい。私が仲に立つていゝ加減なことを云つてゐるか。それとも彼女自身の考へが全くさうなのか、二者何れかと云ふ兩中擇一をば、たつた今お前さんは解くことが出來やう。それを解いてから、いよく正式に失望しやうと云ふんなら、今わしのあとから跟いて來なさい。さみ子に引き合はして直接に失望させてあげるから（我家の戸を叩く）

(その十四) 堅三、守口、留造、富子

こ アラ御一緒にいらつしたの、わたしどうしやう。小父さんは私をかまはず、此方と組んで、そして此方がお氣に召したものですから、度々我家に被^{イラ}來して私に思はせやうとなさるの。

堅 どうして、どうして、そんなことをして可いものか。お前はわしが大變憐^{イト}しく思つてゐるんだもの、そんなことをさせるものか。だが此人は自分の云ふことを嘘だと疑つてゐる。アノ言傳はオレか間に立つてのこしらへ^ここで、お前が此人を嫌つて、私を好いてゐると云ふのは根も葉もない、私の拵へ^ここだと思つてゐるのだ。矢張お前は此人に思ひをかけてゐるのだなんて、途方もない勘ちがひをしてゐるのだから、それを直して貰はうと思つて、引つばつて來たのだよ。お前よく自分の考へを逃べて此人に失望させてあげるが可い。サ、サ、早く〜。

こ (守口に向ひ) マア私の心はモウ〜能くようく解つて下さるぢやありませんか。私の嫌つてるのは誰で、私の思つてるのは誰だか云ふことに就て、マダあなたは私をお疑ひになるんでございますか。

守 いえ此の方があなたの御依頼で、私の宅に被在て下すつたと云ふことに就ては、私驚いたのです、實は私疑念を挿んでゐます、これで私の運命も決してしまふのですから、此最後の御決答は私には實に大事件です。ですから私、更めて今一度お聞き申したいんであがつた次第です。

こ いゝえ、私がかう決心したつて貴方お驚きなさることはございません。この方の仰つたことは私の胸そのまゝでございます。私は何等の躊躇なくあれば心からなる本當のことださきつぱり申します、いつでもさう申します、ハイこゝに、私の前に二人いらつしやいますが、そのお二人に對する私の心持は大變に違つてゐますので、それが爲に、私は、胸をかき亂されてゐ

るのでございます。お一人の方は丁チャンと理窟も立ち、何處へ出しても押しも押されぬ立派なお方で、高尚純潔な心を以て私を愛して下さいますから、私も大へん有がたいことだと思ひ、又非常においさしく思ひます。けれども今一人の方は愛して下さいれば下さる程私は益々嫌でございます。愈々腹立たしくなつてまゐります。お一人の方が斯うしてお目にかゝつてゐるのは飛び立つばかり嬉しく思ひますが、今一人の方が被居るのは恐ろしく、憎らしくて腹が立つて胸が嘔ムカク々致します。私は一人の方の處に行きたいのですけれど、今一人の方と同様になるのは、死でも嫌でございます。斯う申せば私の胸の中は充分お解りでせう。此迄モウそれは長い間酷い苦しみに逢はされてゐたのでございます。ですから私の憐イトしく思ふ方は、何卒御盡力下さつて、私の嫌でならない人の考へを根抵からぶつこはして下さいませ。そして嬉しい、嬉しい婚禮をさせて下さつて、死ぬよりも恐ろ

しいやうな今の苦間クゲンをお救ひ下さいませ。

堅 可いことも、可いことも、私はお前の望み通りにしてやらうと思つてゐるのだ。

こ さうして、下さつてこそ、私始めてほんたうに幸福なのでございます。

堅 そら、さうだらう、今すぐ、さうしてやるよ。

こ こんな恥かしいことを思ひきつてさらけ出したりなんか、あまり蓮葉な仕打ださにはよくわかつてゐますけれども、切迫つまつた境遇は、やむなく若い女のたしなみをも多少崩さなければならぬのですものネエ、お察し下さいませ。

堅 かまはん、そんなことはかまはんとも。

こ ですけど、こんな私のやうな身の上では此我儘は許して戴かなげりやなりませんから、もう私の良人だと疾から思つてゐる方には恥かしいことは

思はないで、胸の中を割つて申し上げるのですわ。

堅 さうだく、可愛い娘だ。

さ アハその方は私を愛してゐて下さる、しるしをお見せ下さいまし。

堅 可いとも、サア私の手を取んな。

さ モウ此上色々思案にお迷ひなさらず、私の待つて待つてしてゐる、同
様になることを早く取行つて、他人の口には構はず私の心をお受け下さい
まし。

(堅三にすがるまれして守口に自分の手を接吻させる)

堅 オウ、オウ、可愛い富ちやんだ。モウく長く苦しい目はさせないよ。

可いか、堅く約束しておく、(守口に向ひ)モウお前さん、此以上何も口を
きくことはないだらうネ、私がこしらへることを云つたのでないよ云ふこと
が腑に落ちたらう。これは私の外には誰にも気がないのだから。

守 あなた、貴女の御胸中はすつかりわかりました。只今のお話であなたの
御胸中……お望みはすつかり腑におちました。遠からずそれ程嫌つて被居
る男を追拂つて差上げませう。

さ さうして戴けば、私これ程嬉しいことはございません。だつて目の前に
居られるのはたまらなくうるさいんですもの、……あゝ嫌で、恐くて、ぞ
つとするんでございますもの。

堅 マアく、靜におちついてゐな。

さ こんなに、思ひきつたことを云つて、小父さん怒つていらつしやらない
？こんなに……。

堅 イヤく、それどこではない、實はナ其奴を氣の毒に思ふのだ、あんま
りお前が酷いことをツケく云ふものだから……。

さ かう云ふ場合ですもの、これ程云つたつて足ることではございません。

守 今に満足させてさし上げます。三日の中には、さほどお厭な奴は貴女の目さきから取り除けてしまひますから、御安心なすつて下さいまし。

さ それはごうも有り難うございす、デハ私これで失禮致します。

堅 (守口に向ひ)あなたには全くお氣の毒でありますが……。

守 いや決して御懸念下さらんやうに、私、最早愚痴はこぼしません、お嬢さんのお仕打は吾々兩人にさつて實に尤なごさ、存じたすから、私も全力を盡してお嬢さんの御希望を叶へるやうに致しまするでござりまするでござります……。

デハこれで、お暇申します。

堅 ひごい目に會ひなすつたね。全く、お察しますよ。

(守口を抱く)

(その十五) さみ子、堅三

堅 ホントに彼は可愛相だよ、自業自得とは云ふもの。

さ ごうして?、そんなごさがあるものですか。

堅 ダガ又あれでお前が、此わしを思つてゐてくれるごさが非常に深く厚いご云ふごさがしじみ胸にこたへた、お前の、その切なる志を一時も早く報ひたい。一週間ご云つてはお前も待遠しくてたまるまいから、明日式をすましてしまはうよ……。

皆を招くごさは最早……。

さ エ、明日ですつて!

堅 お前は恥かしがりだから、サアごなるご氣がおくれやうが、善は急げだ。

さ だつて……。

堅 さ、その用意にさりか、らうかな。

さ (旁白) 大變！、どうかして邪覓せなきや、如何かして……。

第三幕

(その一) さみ子

さ (獨白) ホンに此様な婚禮でおどかされるよりか、死ぬ方がましだわ。どうかして、助からうと避けるたんびに、いつもく屹度邪覓されてゐるけれど、今はぐづくしてゐる場合ぢやないわ、オヤもう日の暮だ、いくら日暮だつてこわかないわ、彼の方のところへ行つて、何とかしていたゞくわ。

(その二) 堅三、さみ子

堅 それもう歸つてきたぞ、これから、あすの準備を——。

さ アラまあどうしやう。

堅 オヤお前か、今頃どこに行くのだ。少し疲れたから部屋でやすむつて、

先がた云つたぢやないかれ。

さ さう云ひましたつけ。けれど……。

堅 けれど、どうした。

さ 私大變なこゝになつちまつてよ、小父さん。どんな風にお話ししたら可いか、あんまり何でわからないんですけれど……。

堅 何だ、何だ、どうしたと云ふのだ、一たい……。

さ 内所事よ、變な。私が出かけるのもよし子の爲なのですわ。そんなこゝはいけませんつて、私大さういけんしたのですけれど、よし子は私の部屋をかしてほしいつて云ひますから、かしてよし子を入れて來ましたの。

堅 それが何だ。

さ 小父さん、誰にも云はないでゐて頂戴、アノ子よし子は今日來たアノ守口さんと疾うから可い仲になつてゐるのですよ。

堅 何、守口の野郎さ、よし子さんさか？

さ ハア、そりやモウ夢中なのよ、マア奇態な、いくら云つたつて聴きやしない、大のぼせにのぼせてしまつて、……そして斯う云ふんですよ。あの人には焦れぬいてるんだ。そしてあの人も私に……二人はもう一年あまりも仲よしになつて、お前たちの知らぬ可いことをして楽しんできたのだつて……。

堅 馬鹿な女だナア。

さ それで私が今日よし子の情人を散々に悪口したもんだから、あの人も氣をがっかりさせて餘所に行くかも知れない。そんなことでもしたらよし子は一日だつてもたまらないから、何卒何處にも行かないやうにしてくれさ頼みに來たんですつて、……でよし子は私の名を名のつてあの小路に向いてゐる私の部屋からのぞいて、情人と話がしたいんださうです。私の聲色

をつかつて、やさしいことをかけて、そしてがっかりしかけてゐるのを取りもごさして、やはり此土地に居るやうにするのですさ、まあつまりあの人が、私を慕つてゐるのを、巧に應用して、そしてよし子が自分の思ひを遂げやうと云ふのですわ。

堅 それでお前はそこをどう思ふ？

さ 勿論！勿論！私ばあんまりだと思つて腹がたつてよ。何だつてよし子、氣がちがつたのつて云つてやりましたの、あんな浮氣ホイ音生男を慕ふなんて、よく恥かしいことないね、女の道もわすれて、よくも一年あまりも人前へのめく顔出しが出来たのね。お前の夫と云ふのは歴とした方が丁さきまつてるのに、其人をだまして、失望させて可いんですかつて、私ひごいと思つたけれど、あんまりだと思つたものですから、つよくきめつけてやりました。

堅 それ、それ、その考をお前が持つと云ふのは何より結構……だがアノ兄には寧ろそんな女が適當だ。少しはそんな目にあふのが可いのだ、可い氣味だ……。

さわたし、ごうしたら可いでせう。そんなこといけませんつて一べんに斷はらうと思つたんですけれど、よし子はモウおろ／＼なきで一生懸命なものですから、可愛さうにもなりましたし、それに天にも地にもたつた一人の血をわけた妹のこさなり、ツイ嫌とは云ひ兼ねて、ようござんすとは云ひましたけれど、事がらが事からですから。

(10)

堅 イヤ、いくら血をわけた姉妹でも、かりにもお前の聲色をつかつて不貞腐れたこさを黙許するわけには行かぬ。

さ テモ可愛相ですけれど……が、外ならぬ小父さんの仰せですから、私からよくその譯を云つて返しますから、小父さん誰にも云はないで勘忍して

やつて頂戴ナ、ネ。

堅 よし、よし、そいぢや、さうしたら可いだらう。

(こみ子退場)

堅 ア、早く兄きに逢つて此話をきかしてやりたいナア——。えらさうなことを云つてたが、爺め店頭してやられたぢやないか。いや、こいつは是非話してやらなきやならぬわい、へ、へ、へ。

さ (家の内でのくり話) え、それはよし子、私全く察しちやあるけれど、じうもそれだけはよいつて云へないことよ。それぢや大切だと思ふ名譽が險難ケンナンですもの、アハ左様なら。あまり晚くならない中にお歸りなさい。

(室を出てくる)

堅 あの阿呆女め、屹度おれを怒つて恨んでるんだらう、又舞ひもごらんやうにドアの錠をかけさいてやらうかな。

(11)

さ (旁白) あゝどうか此計畫がうまくゆけば可いがナア、あの方はどうなす
つてゐるんだらう。

堅 旁白) 一昧どこへ行くんだらう、一番あそをつけてこまさう。

さ (旁白) 春の夜の闇はあやなし、アアこんな時幸ひと闇夜なのはせめても
の事だわ。

堅 情夫の宅へかな、何をするつもりなのかしら。

(その三) 守口、堅三、さみ子

守 (大急ぎの様子で出て来て) うん、さうだ、今夜やつて見やう、會つて話
が出来るか知ら……あなた……そこにゐるのは……。

さ アレ静に、守口さん、あなたいらしつて下さるだらうと思つて待つてま
したわ。私さみですよ。

堅 うそつけ、阿魔つちよ、富子なもんか、彼女^{アレ}は疲れたつて内にやすんで

ゐる。他の名と聲を騙る阿魔つちよ女が……。

さ (守口に向ひ) あなた、何はおいても婚禮して下さるさ……。

守 さうですとも、それが私の唯一の希望なのです。明日何處でも、あな
たのお望みのところで、儀式を行ふことを私確に約束しておきます。

堅 (旁白) 馬鹿だな、可哀相に。

守 こわがらないで家へおはいり下さい。モウあの頓痴氣なんて何とも思ひ
せまん。

さ (小聲で) 手紙であんなことを申上げて、嘘はしたなくお思ひでしたらう
に……。

守 イエ、イエ、決して、決して、兼ての望みが充たされて私、こんな嬉し
いことはございません。

(その四) 堅三

堅 (獨白) あゝ、恥不知め、色餓鬼め、阿窺ツチヨめ、男が男なら、女も女だ、似たもの夫婦でこれも可からうさ、ハ、ハ、ハ、彼女に貴様がどんな約束をしようさ、おれはちつとも妬きはせん、私は私で、立派な本物の富子があるんだ、厚かば女郎と一緒にたつて後で後悔するのも可いだらう、私は亡父の遺言トヤヂもあれば其氣もあるから、姉の方だけは無缺ムキツに育て、行くのだ。

(その五) 堅三、代書人、公證人、従者

代 何か御用ですか。

堅 少しお願ひしたいことがあるんで、御足勢だが宅までお出を願ひたい。

代 ア、丁度今出かける所なのですから可い序です。

堅 實は少々さし追つた用事でしてな。

代 何ですか。

堅 一つ此家に入つて行つた、婚禮しやうさとしてゐる二人の男女を驚かしてやつてほしいのです。私どもの知合の娘で、それを守口と云ふ男が騙して夫婦になるからと云つて自分の家につれ込む計略なのです、娘は身分も、家柄も可いものですが、それが……。

代 そりや可い都合です、實は此方は公證人なのです。

堅 ハア此方が。

代 いかにも公證人です。

公 そして又、紳士であります。

堅 勿論さうおあんなさう、此處からお入り下さい、物音を立てんやうに願ひます。肝腎の中の二人が逃げ出してはおぢやんですから、御足勢の報酬は十分致しますから、先方の賄賂なごさつちやいけませんぞ。

代 何ぞ仰つしやいます、苟くも公職に従事するものです。

堅 イヤ、何も皆さんの職業を輕蔑したわけではございません……私は直ぐ兄を連れてきますから、暫らくお待ち下さい……。

(旁白) 一つ兄の薄のろ男を驚かしてくれやう。

(新助の家の戸を叩く)

(その六) 新助、堅三

新 ごなた？、あ、お前だったのかい。

堅 おいでなさい。兄さんは結構な後見です、ま、来て下さい、可い者をお目にかけますから。一寸、一寸、一寸、一寸、ホンの一寸だけおいでなさい。

新 何だ子。

堅 極上飛切のことを御通知に来たのです、一寸。

新 さつぱりわからんな、だしぬけに妙なことを云つてきて？。

堅 失禮ですが、よし子さんは何處においで？すな……。今頃は阿魔つちよさん、ごにごにござるやら、わしと云ふ者ないならば、かうした破目にはなるまいもの、ツンテンか、ハツハツハツ……一寸、一寸……新 ナセそんなことをきくんだらう。よし子は今晚はお友だちの家の夜會に行つてるよ。たしか。

堅 でせうとも、たしかに、だから私のあさから眠いて被居い、ごんなお友だちの家だか、ごんな夜會だかお目にかけます。

新 お前どうかしたのかね。

堅 兄さん、あなたは立派によし子さんを育てましたね、いゝえ、嚴格な教育はいけませんよ。やさしくしてやれば愛してくれるでせうよ。人を信用しなかつたり座敷牢におしこめておくのは、女房や娘に過失なくすることにはいけないでせうよ、女は少しは自由にさせるものです、きびしくす

れば却つていたづらをするものです。あなたの仰しやることは、茄子の花と一緒に、千に一つのおだもありませんね、お陰さまでよし子さんは大人おさなく成人しましたネ。

新 一鉢お前だしゆけに、ナセそんな妙なことばかり云ふのだ、オレは一向解せぬがな。

堅 今に解せる様になるでせうよ。兄さん、兄さん、因果は觀面、あなたの放任主義の教育はごうです、二人の姉妹に對するあなたと私との教育の結果が、ちやんと知れました。一人は誰かれの區別なく男のあとをつけ廻はす——一人は男と云ふ男を悉くはねつけてゐます。

新 勿体をつけずにお前の謎をさいて云つて貰はう。

堅 無論解がなくちやおきません。よし子さんのお友だちていのは、守口と云ふ女たらしのことです。その宅へ行くよし子さんの姿を、私この光る

目でちやんと見届けたのです。今頃は彼奴の頸ツ玉にかざりついてゐませう。

新 誰が？。

堅 よし子さんが……。

新 冗談ものだ、よしてくれ。

堅 誰が冗談を云ひますものか。甚お氣の毒ですが、守口てい奴が今よし子さんを自己の家に引張りこんでゐるのです。子、こみ子に結婚を申込むより以前……否已に一年もさくの以前、已に二人はちやんと出来てゐたのを知らぬは亭主ばかりなりでさ、も一度申しませうか。念の爲に……。

新 お前の云ふことはとても。

堅 本當とは思はれませうまい。兄様は御自分で御覽なすつても本當さは信ぜられないでせう。何です、何です、兄さん、(我前額をさし)頭が空虚ぢや

ない、よい年をして、それが何になります。年の効よりは龜の甲の方が此節皆人がよろこびますとサ、へ、へ、へ。

新 何を、お前は、一体私に……。

堅 益佳境に入ってきたぞ……たまらない、私は一体あなたに……いや何も申すことはありません。今にわかります。私が正直正銘のことを云つてると云ふことが……、既に一年以上も二人が相通じてゐることがわかりませう。

新 それは、全然解せぬことだね、あれが子供の時から充分信用を置いて自分の本心に背いてまでもわしの意見に服従させやうなどは毫頭したことがない。それに何ぞや、私にかくれて、そんな約束を内々にする……そんなことがあるものか……。そんなことがあるものか、そんなことが……。

堅 貴兄アサキが自分で例をすれば可いのです。それに今即座に結婚の手續をして

しまへば運がつきはしません。それは私も望むところですから、代書人と公證人とを連れてきました。こんな運のついた者を見さんも女房にしやうなどは思はれないだらうと私もさう思ひます、あ、氏より育ちだ、あなたがせられた教育はかう云ふ結構な報酬を齎らせました。

新 彼女が嫌がるものを無理に私の心に従はせやうなど云ふ程、私は、わからずやではあるまいし、マサカそんなことをあれが……。

堅 下らない議論よりも證據です、サア行きませう、行つて御覧にかけませう。

(その七) 代書人、公證人、堅三、新助

代 いやあなたがた、此に就て無理に強いると云ふことは全く要らんのであります。只婚儀を舉行すると云ふことだけさへ御同意で御承諾なら相互の御本人のお二人はごちらも至極御希望でゐられるのでありますから、御心

配は入らないのであります。守口さんの方は既に契約書も御判も済んで、御令嬢を奥様にお貰ひ受けになることを既に御承知になつてをりますのですから。

新 娘はどうしてゐる……。

代 お居間の仲に錠を占めきつておはいりになつて、あなたが此事を御承知ない間は此室を出ないつて云つていらつしやいます。

(その八) 守口、堅三、新助、代書人、公證人

守 (窓のところに身を出して) 御承知下さらない内は何誰だつて家にお入れ申ません、あなたは私を御存じなのですから、そこにある契約書に私が印を捺したのは何も輕卒ではないと思ひます。ア、私共の結婚を御同意下さるんなら、どうかあなたも御判をなすつて下さい。併おゆるしなくば、私は私の愛する人さわかれるより寧死んでしまふんです。

堅 イヤ別れて下さいなご、は決して申しませぬ、(旁白) 奴めまだ富子を自分の者にしたと思ひちがひをしてゐやがる。この誤解を利用せんけりやならぬぞ。

新 (守口に向ひ) 併それはよし子のことですか。

堅 兄さん、黙つてゐなさい、何も云ふことはないです。

新 だけども。

堅 だまつていらつしやい。

新 誰のことだか、唯一言それを……。

堅 マア、マア、マア、マア、黙つてなさいと云ふに。

守 さにかく何事が出来しやうとも、富子さんは私との約束を守り、又私はさみ子さんの語を守るのですから、私、十分考へたのですが、私は決してあなた方が不服をお唱へにならないだらうと思つてゐます。

新 あなたの仰つしやることは一体。

堅 靜にしてお出でなさいつたら、此には譯があるのです、今に秘密は解けますから、(守口に向ひ)可いです、今あなたの側に居る婦人と御結婚なさることに向つては吾々は何様の異議もありません。否、満腔の赤誠を以て至極御同情御賛成申し上げます。

代 證書も此通り、規定の條件を備へてちやんと出来てゐます、まだ御殿さんにお目にかゝらないものですから、其お名前を書くところだけはあいて居ますが、外の欄は皆相當の文字で埋めました。(新助に向ひ)あなたが御判を下されば御婦人は直ぐに御判を下さるのであります。

守 私、此條件に對して少しも異存は在りません。

堅 私も同様です、よろこんで御同意申します。(旁白)サアいよく面白くなつてきたぞ、(聲高く)兄さん判を捺しなさい、あなたが先づ判をなさる

答だ。

新 しかし此秘密……。

堅 え、何をむづかるのです、印をなさい印を……印を印をアタ面臭い。

新 けれども此方は富子さんとお云ひだし、お前はよし子だと云ふし、何が何だかサツパリわからんではないか。

堅 若よし子だったら御同意なさらないんですか。

新 そんな事はないが。

堅 チヤア印をおしなさい、早く、早く、早く、早く、私もコレかうやつて捺印しますから、早く早く、早く、ネ、可いでせう。

新 あゝ可し、それぢや、それでも可い、さつぱり狐馬にのしたやうな氣がして、理窟はちつともわからぬけれども、したいまゝにして云ひたいまゝになつてやらう。

堅 秘密は今直ぐに解けますよ。

代 デハ後程又伺ふことに致しませう。左様なら。

公 私も失禮いたします、ハイ左様なら。

(その九) 堅三、新助、よし子、はる

よ あゝいやだ？、あの人達何てうるさい人なんだらう。あんな者がぬちや私たちとてもあの會に出てぬられやしない。

は 皆が我がちにお嬢様に向つてチャホヤしてゐますことぞ。

よ あんな風の嫌な人達に、わたしまだ會うたことなくつてよ。頭の中の空^{カラ}つげけな人の馬鹿よか、わたし面白くもない話でも構はない、ホツリ／＼話して埒があかぬ人の方がまだ、ちつとはましたと思ふわ、あの人達は亞麻の假髪^カをかぶつた自分達に向つちや外のものは皆とてもかなやしないと思つてるのよ、そしてあのいやなまるで人を馬鹿にしたやうな話ぶりて年

をさつた人の戀の噂をすれば、此上なしのえらものゝやうに思つてゐわ、けれど、私はアンナえせハイカラな生若男に大騒ぎされるよりか老寄の心の方が嬉しいと思ふわ、堅實で可いわ。あら、あすこにいらつしやる。

新 よし子、わしは別に小言を云ひたくはないのだが、さりさはお前なさないことをしてくれただではないか、私は此までお前の心を、無理抑へつけにしたことは唯の一度だつてありやしない。又始にお前はお前の自由で勝手にしろと云つておいたではないか。それなのに私の心も汲まないで、私の目をぬすんでアンナ淫^シらな約束をするナンテ、私は大變残念に思ふ、あまりかまはなかつた私の教育も悪いかしらぬけれど、かまはれないのを幸に自分のすきすつぼうをして淫^シらなまねをするお前はマア何たるなさいないお前だらう。

よ どうしてそんなことを仰つしやるんですか……私には一向わかりません

が……小父さん、私はもこのよし子ですわ、昨日そのまゝのよし子であり
オト・ヒ一昨日そのまゝのよし子ですわ、小父さんを有がたく思つてるのは此迄の
 通りで、ちつとも變りはしませんことよ。小父さんより外に心を寄せる方
 がないのも此迄通りで、小父さんの御心次第でわたしあすにでも今にでも
 小父さんと婚禮しませうよ。

新 (堅三に向ひ)お前は何を證據にあんなヒョンなことを云つてきたのだ。

堅 をかしいな、そいぢや、よし子さんは今守口と云ふ男の宅から出て來た
 のではないのか、今日と云ふ今日お前さんはあの男と戀の始末をつけたの
 ぢやなかつたのか、最早一年あまり、アノ男と通じてゐたのではなかつた
 のか。

よ マア、マア、マア、誰がそんなことを申しましたの、私のことを、守口
 と通じたナンテ、聞くも汚らはしい……可いお世話だ、誰ですソんなあり

もしない噂を製造してゐるのは……。

堅 ハテナ、これは一体どうしたんだ。

(その十) さみ子、守口、よし子、新助、堅三、

代理人、公證人、はる、留造

さ よし子さん、あなたの名を騙つたりなんかしてゆるして頂戴ナネ、何分
 事が差迫つてたものですから、ツイ一寸間に合はせにお名前を拜借しまし
 たのよ、よしさんは定めて私を仕方のないアバズレ女モノのやうに思召すで
 せうけれど……あなたと私とは事情が違ふんですもの……。

(堅三に)小父さん、私ばあなたに向つては別におわびすることはないと思
 つてよ。私の盡すだけのことは盡してあるし、何も小父さんに向つて不都合
 をしたわけでもないんですから、つまり、小父さんと私とは氣心が合は
 ないんですネ、これだけ長い間一つ棟に住んで、も氣心が合はなきや仕方

がありませんわ、デ、ネ、どうせ縁は因縁づくの者ですかりネ、ごうかあしからず御あきらめ下さいましよ。私小父さんのお心には向かないんです向かないからつて後になつて不都合なことをして小父さんの顔に泥を塗るよりか、此方がまだと思つて、他の方に私の心をさし上げたいと思ふんです。

守 (すまし込んで堅三に向ひ) 私はあなたのお手からさみ子嬢を頂戴するのを大層名譽なことを存じまして、こゝにあつく御禮を申し上げます。此さみ子嬢が私に心をよせ下さるやうに此なが年御養育下さいましたあなたのお骨折を思へば衷心感謝の至に堪へません。

新 お前は文句をつけないで、守口さんのおこぼれを心よく聽かんけりやならないぞ、お前は此迄自ら變なことをやつてきて、自ら此ハメに陥つただ、世間ではお前を一杯喰はされたことを思へ、氣の毒だなど云ふものは

(13)

誰一人なからうよ。あゝ氏より育ちかな、へ、い、い。

は 私だつて一言せない譯には行きませんが、あなたがあゝ云ふことを爲さつてかう云ふ破目におちいりなすつたのは蓋當然のことで、世間一般に對してはよいみせしめになるであります。

よ こんなことになつて本當にお氣の毒ですけれど、唯お氣の毒つて云ふより外何とも致し方がございません、座敷率をお設けになつた報酬だと思ひなされるより致方がございますまい。

留 わたしも始めつからさう豫想しておりました、當になるべきものがあるべくなつて、お互がお互のおちつきごにおちついたと云ふものです、コンナことを申すさ巴里の下男は生意氣なことを云ふと怒られるかも知れませんが、へ、い、い。

堅 (ヤツと口がきけるやうになつて) ……あゝ、あゝ、女を信じる者よ、

汝の名は薄命なり。至善の行に對する最悪の結果を得るときは何たる事つた
い。婦人は男子を苛責する爲に生れてきた奴だ、私は七生まで女を咀つて
やる。

留さやうく。

新皆さん、私のうちへお出で下さい、これの立腹は明日までかゝらぬと冷
却しますまい。

一同 ぢや皆さま御一緒に……。

はる (看客に向ひ) こんなわからずやがありましたら、直ぐと私にまでおし
らせ下さい、モウ段々こんな變珍漢はへつてまぬりますから、私 舊世紀
の遺物として之を大切に保存しやうと思ひます。

(幕)

モリエール 喜劇 良人學校 (終)

大正三年十月一日印刷
大正三年十月五日發行

(定價金拾錢)
(郵税金貳錢)

三ナワ叢書
第四編
良人學校

著者

三浦圭藏

發行者

吉田直次郎
大阪市南區內安堂寺町二丁目六十九番地

印刷者

南谷新三郎
大阪市西區北堀江御池通二丁目六番地

印刷所

南谷活版所
大阪市西區西橫堀御池橋西詰附入

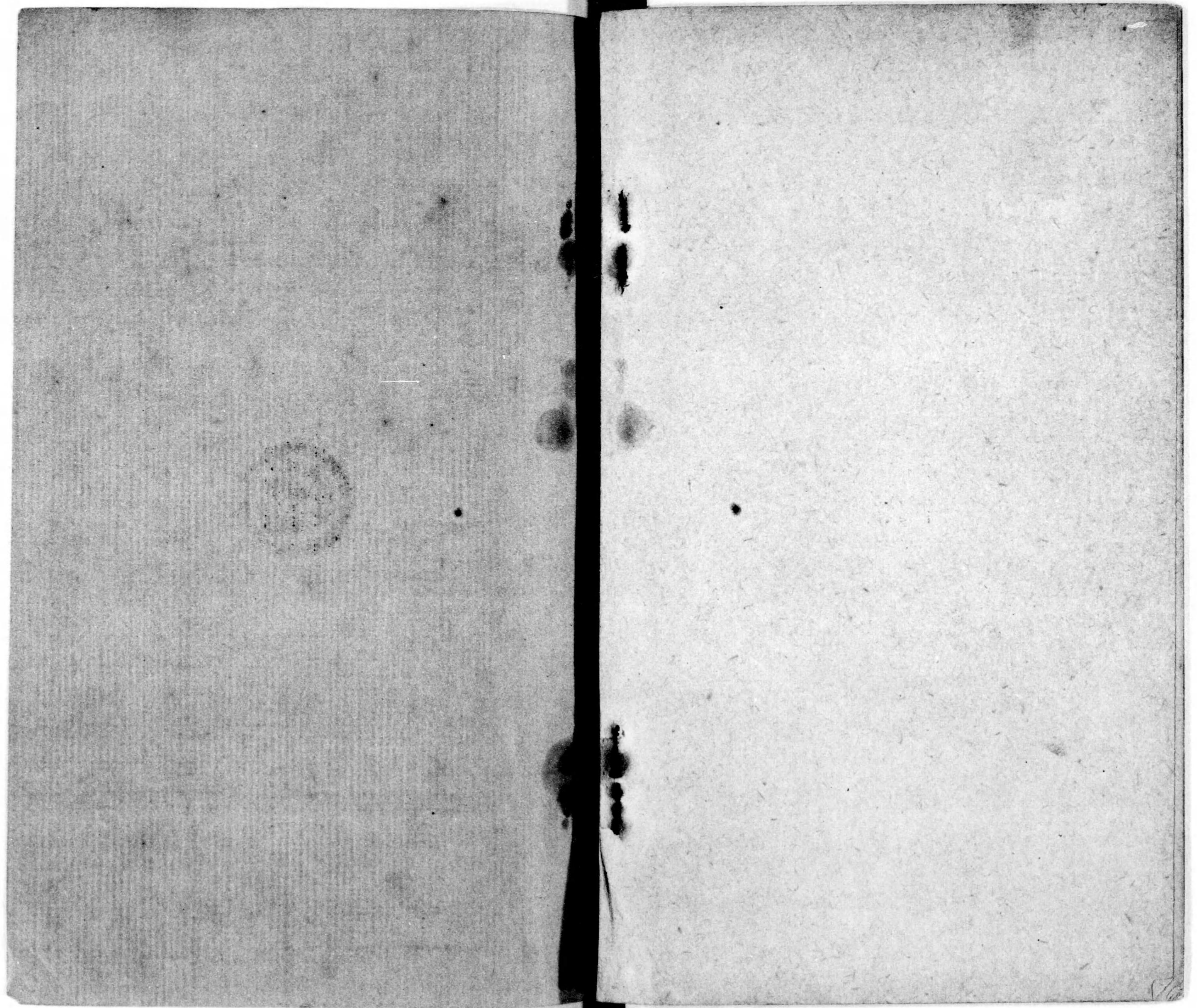
發兌元

大阪市南區內安堂寺町茶町筋
電話南一四七七番
振替大阪三四一五番

賣捌所

全國各書林
越後屋





終

